

324
1
626

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5

始



石川舜台著

〔改訂再版〕

改悔文解説

發兌元

東京 森江書店
金澤 池善書店



大正
13.6.6
内交

改悔文解説自序

「祖師聖人ヨリコノカタ、一念歸命ノコトハリチス、ムトイヘ
ドモ、念持ノ義ヲシヘズ。コ、ニ先師上人コノ義ヲツマビラ
カニシテ、無智ノ凡類ヲシテ、明ニ難信金剛ノ眞信ヲ獲得セシ
ムルコトヲ致ス。マコトニコレ先師上人ノ恩徳ナリ」トハ遺徳
記ニシルスコトバナリ。先師上人トハ蓮如上人ナリ。然レバ蓮
師ノ化導ハ念持ノ義ナリ。御文モ御一代聞書モ、念持ノ義ノ化
導ナリ。安心ノ手本トナサレタ改悔文モ、言フマデモナク念持
ノ義ナリ。蓮師ノ教サセラレタ安心ヲ心得ントスル者ハ、念持
トハイカナル義ナリヤトイフコトヲ心得ズシテハ、御文モ改悔

文モワカル道理ナシ。古ヨリ御文改悔文ヲ講演スル人少ナカラズ。然ルニ念持ノ義トイフコトヲツマビラカニ説キタル人ハ甚少ナシ。遺憾至極ノコトナリ。

吾人ハ此ニ感ズル所アリテ本編ヲ著ス。其先輩ノ説ニ拘泥セザルガ爲ニ、奇異ニ思フ人モアルベシ。元祖ト祖師ノ異同ヲ説クガ如キ、意業ト安心トノ別ノ如キ、至心廻向ノ説ノ如キ、疑ノ解釋ノ如キ、報恩行ノ如キ、其他猶アルベシ。然レドモ吾人ノ言フ所ハ、一言ノ私説ナシ。盡ク相承ノ釋ニ依ル。相承ハ佛語ヲ相承スルモノナレバ、即佛語ナリ。佛語ハ佛意ナリ。佛意ヲ傳ヘテこそ佛敎ナレ、佛意ノ外ニ手作リノ法語ヲ宣傳スルハ、佛敎ニハ非ルナリ。吾人ハカ、ルコトハ爲スニ忍ビザルナリ。

モシモ手作リノ法語ヲ宣傳スルナラバ、ソレハ佛敎ニ非ズ、眞宗ニ非ズ、何トカ云フ他ノ宗敎ナルベシ。祖釋ノ謹嚴ナルコト、覺師ノ剛直ナルコト、蓮師ノ整恪ナルコトヲ見レバ、實ニ一句一言モ放漫ヲ許サズ、逸脱ヲ許サズ、私横ヲ許サズ。自省シ自戒懼シテ稍ク此一編ヲ成ス。筆ヲ措テ一讀スレバ、言フテ詳ナラザル者アリ、詳ニシテ繁ナル者アリ、述テ盡サル者アリ。之ヲ刪正スルヲ可トスベキ者、之ヲ補添スルヲ宜トスベキ者、猶少ナカラザルベシ。他日更ニ勇ヲ鼓シテ、以テ此ニ從事スベシ。要スル所ハ同行ノ諸君ノ、能ク佛祖ノ意ヲ體シテ、蓮師念持ノ教義ヲ服膺セラレンコト、自他ノ幸焉ヨリ大ナルコトナシ。

大正九年九月一日 東京高輪ノ羈窓ニ於テ 舜台識

改悔文解説自序

324-626₁

改悔文解説目次

- 一 緒言……………一
- 二 科を分ちて總説す……………二
- 標 (改悔文の本據)……………六
- 釋……………六
- 一 相承……………六
- 二 願成就文と六字釋とは衆生の安心……………(教とは釋迦の)……………一〇
- 三 覺師を忘るべからず……………(覺師一生の主張)……………一九
- 四 願成就と六字釋との祖の所見……………(覺師は右の如くであるか)……………二二
- 五 念持の義……………(元來言南無者)……………二八
- 六 祖と蓮師との義門の差別……………(是は立義門と)……………三二

目次

七 念持の義の再説……(以下は念持の義を)……………三八

八 信心は六字のうちにある……(此信心か六字の)……………四〇

九 念持即信心……(元來念持の義)……………四三

十 願成就と念持との異同……(間念持の義は)……………四九

結……………五五

三 入文に二科を分つ……………五六

初に安心 (もろくの雑行より御たすけ治定と存じまで)

二に知恩 (このうへの稱名はよりまもり申へく候まで)

初の安心に二節を分つ

初に歸命 (もろくのよりのみ申て候まで)

二に發願回向 (たのむ一念より御たすけ治定と存じまで)

但し、之を能聞所聞に分るときはもろくのよりのより、御たすけ治定までが

所聞の教なり、と存じが、能聞の念持の信なり。

是より安心の中の歸命のころを解く

標 (此改悔文は)……………五七

釋……………五八

一 改悔の意義……………五八

二 雜行……(雜行は五正行の)……………五九

三 雜修……(雜修と云ふは)……………六一

四 自力……(自力のころとは)……………六二

五 疑心……(こゝで疑心のこと)……………六四

六 疑は自力の信……(本願を信するに就て)……………六九

七 一心……(一心にとは)……………八〇

八 覺體と名號……(阿彌陀如來とは)……………八一

四

九 われら……(われらが今度の)……………八九

一〇 御たすけ……(御たすけ候へ)……………九一

一一 御たすけ候へとたのみ申て候……(是で御たすけとたのむとの)……………九四

一二 佛と衆生との目的と手段……(彌陀も又手段と)……………九九

一三 たすけたまへは信か願か……(問曰たすけたまへは)……………一〇一

一四 願生歸命辯……(願生歸命辯に云)……………一〇四

一五 意業と安心の別……(案するに其根さす所は)……………一一〇

一六 意業の憶念の解説……(問曰改邪鈔本五)……………一一五

一七 決定の願……(問曰たすけたまへと)……………一四〇

一八 たすけたまへを願と云ふは不正義ならずや(それなればたすけたまへは)……………一四四

一九 依正の同異……(或は一類の拘泥者)……………一五一

是より發願回向のこゝろを解く

一 一念……(たのむ一念のときとは)……………一五四

二 往生一定御たすけ治定……(往生一定は)……………一五七

三 と存じ……(と存じとは)……………一五九

四 覺師の功勞コウラク……(是に於て注意)……………一六三

五 六字……(若言南無者の釋を以て云は)……………一六六

六 傳持の佛語……(此の如くであるから)……………一六九

七 意業は安心に非ず……(こゝで心得れば)……………一七四

八 憶念の喩……(然るに祖師は)……………一七九

九 存じの再說……(又存じの言が)……………一八六

結……………一八八

一 所聞能聞……(以上解釋する如く)……………一八八

二 兒童の喩……(喩ば珠算の)……………一九〇

二に知恩に三節を分つ……………一九四

初に佛恩を報ずることを明し

二に師恩を重ずることを明し

三に雙べて結ぶ

是より佛恩を報ずることを解く (文はこのうへの稱名は佛恩
報謝とよろこび申候也)

標 釋

- 一 報恩行に就て……(即信後相續の稱名)……………一九四
- 二 報佛恩行の典據……(佛恩を報ずると云ふは)……………一九六
- 三 稱名報恩の師釋……(かく重大な)……………一九八
- 四 報佛恩行の性質……(報佛恩の行は)……………二〇三

五 信後稱名の性質……(南无阿彌陀佛の回向の)……………二一〇

結 報恩行は義務にして權利……………二二二

是より師恩を重ずることを説く……(文はこの御ことはりより
ありがたく存じ候まで)

標 師は福田なり……………二二七

釋

一 善知識の通解……(此文の中)……………二二七

二 開山たる所以……(師恩に就て)……………二二九

結

補遺 開山たる所以の下

元祖出世等なき理由

第一 廻向の義……(問曰廻向の)……………二二二

目次

八

第二 翻譯の評……(問曰彌陀法の)……………二二四

第三 扶師立義……(昔師自立)……………二二八

第四 元祖吾祖の異同……(元祖と我祖)……………二五九

第五 二祖著述の對看……(此針路の)……………二七一

第六 梵本大經成就文より觀たる吾祖……(以上にて)……………二八〇

是より佛恩師恩を雙べ結ぶこころを解す (文は此上はより終まで)

標……………三〇二

釋

一 掟の意義條項……(掟とは)……………三〇二

二 王法の説明……(王法と佛法に對する)……………三〇四

三 全信徒の必要なる勅語法令……(憲法等)……………三〇五

四 憲法の大要……(憲法は)……………三二三

五 教育勅語……(教育勅語は)……………三一三

六 時機に應せざれば佛教に非ず……(又蓮師の時代)……………三一五

七 自利利他……(此言と行と)……………三一七

八 平等差別……(平等差別の)……………三二二

九 佛教の觀念……(佛教では)……………三三四

結……………三三八

改悔文

モロくノ雜行雜修自力ノコ、ロチフリステ、一心
ニ阿彌陀如來我等が今度ノ一大事ノ後生御タスケサ
フラヘトタノミマウシテサフラフタノム一念ノトキ
往生ハ一定御タスケ治定トゾンジ、コノウヘノ稱名
ハ御恩奉謝トヨロコビマチシ候コノ御コトハリ聽聞
マウシワケサフラフコト御開山聖人御出世ノ御恩次
第相承ノ善知識ノアサカニザル御勸化ノ御恩トアリ
ガタクゾンジサフラフ、コノウヘハサダメオカセラ
ル、御チキテ一期チカギリマモリマウスベク候

改悔文解説の再版に會して

改悔文解説は、充分に、周到に説明したと思ふが、猶數言を
費すの必要なるを覺えた、それは所歸即ちたのむめあてが、佛
體か、名號かといふことである。

自分の著述した、中外出版會社から發行した、眞宗安心の根
本義と名づけた書に就て、某々の僧侶から、本山の侍董寮へ何
か書面を出したといふ事で、其主意は、たのむめあてを名號と
いふがわかるるか、わからぬるか、いふことである。傳聞した。
手造り安心でなくては安心でないやうに思ふ人の多い中に、兎
に角、かゝる疑問を起されたは、喜ぶべきことで、空谷の登音

ごも云ふべきことである。

二

然るに其論ぜられることは、いかなることであらふか。

眞宗の安心は、佛體をたのむのである、名號をたのむは、異安心じやご云ふのであるか、又は、名號をたのむもよいが、佛體をたのむもよい、それを名號をたのむにかたよりて、佛體をたのむを、異安心じやご云ふが、わるいご云ふのか、前説であるか、後説であるか。

前説であるならば、明に祖師聖人に背くのである、祖師聖人は、尊號銘文には、他力の至心信樂をふかくたのむべしご仰せられ、唯信鈔文意には、本願他力をたのみごあり、御消息集には、念佛をふかくたのみごあり、和讃には、本願他力をたの

みご云ひ、又、佛智の不思議をたのむべし又如來の廻向をたのむご仰らる、至心信樂も本願他力も、念佛も、佛智の不思議も、廻向も、其體は、名號である、しかれば祖師の安心は、名號をたのむ安心である、佛體をたのむ安心ではない。

蓮師が、御文に、聖人御相傳一流の肝要は、たゞこの信心ひとつにかぎれり、これをしらざるをもて他門ごし、これをしれるをもて眞宗のしるしご仰られ、其外にも聖人一流ごも、親鸞聖人の一流ごも仰られた安心は、此祖師聖人の、名號をたのむ安心のごことである。

もしも、此名號をたのむ安心を改めて、佛體をたのむ安心ごなされたならば、蓮師は、祖師の安心ご違ふのである。其やう

三

なここが、あらう筈がない、蓮師自ら之を知れるをもて眞宗の
しるしと云ひながら、名號をたのむ祖師の安心をしらずに、佛
體をたのむ安心であるならば、之を知らざるをもて他門とするの
他門の人となられたのである。

祖師の安心を知らぬ人は、御文の彌陀をたのむとあるを、佛
體をたのむこと、早合點して、蓮師を、佛體をたのむ安心であ
ると云ふは、誤であつて、此誤を祖師にまで及ぼして、眞宗の
安心を、佛體をたのむ安心とするは、あやまりの上に、又誤り
をかさねるのである。

又後説ならば祖師の安心が、佛體をたのむ安心でないこと知り
て、蓮師が佛體をたのむ安心らしく見へて、祖師とはちがふこと

定めるときは、蓮師を異安心とせねばならぬ、そこで思案工夫
した結果、調停ぬりまぶしの方法を案じ出して、名體不離であ
るから、名號をたのむもよし、佛體をたのむもよしと、黒も
せず、白もせず、灰色的にぬりまぶす人の説である。

名體不離といふことは、相承には見へぬやうであるが、名體不
二といふことは、存覺にも、蓮師にもある、存覺は六要鈔化
卷本に、韋提の口稱念佛と、佛體とは、名體不二と云ひ、蓮師
は、帖外御文三に、佛體の徳を、名號に攝する義を以て、名體
不二と仰せられた。

佛體の徳を名號に攝することは、大經の文に明である、十二
光は佛體の徳である、それを無量光佛無邊光佛無導光佛乃至超

六
日月光佛と號たてまつるご、名號にして説いてある、又阿彌陀
ご云ふが、無量壽無量光といふ二義をあらはす、其無量壽無量
光ご云ふことが、光明無量壽命無量のことで、報身の全徳であ
る。光壽無量が、報身の佛體であることは龍樹菩薩が、智度論
に(三十四卷)判釋なされてある、此の如くであるから、佛體即光
明無量壽命無量の徳は、名號に攝りてある、此名號を廻向して
衆生をたすけたまふ彌陀であるから、名體不二ごあるは、體徳
が、名號にたさまつてあるを、行者に知らせる爲のことはであ
る。

名體不二であるから、體がよいと思ふ者は體をたのため、名號
がよいと思ふ者は、名號をたのため、ごちらでも、すきなかたに
せよといふ爲に、名體不二ご云ふたのではない、帖外の御文に、
名體不二の正覺をこなへましますゆへに、佛體も名にたもむき、
名に體の功徳を具足するゆへに、なにごはかばかしく知らねご
も往生するなりご仰られたは、佛體の徳が、名號に具足してある
其名號を廻向してくだされるから、凡夫が、報土に往生するの
であるご仰られたので、ごちらでもよいごなされたのではない。
以上にて、意義は明白であらうと思ふ、改悔文解説の既刊の
阿彌陀如來の説明ご、見合はされたい、猶拙著眞宗大義をも、
見合はされたい。

大正十三年四月

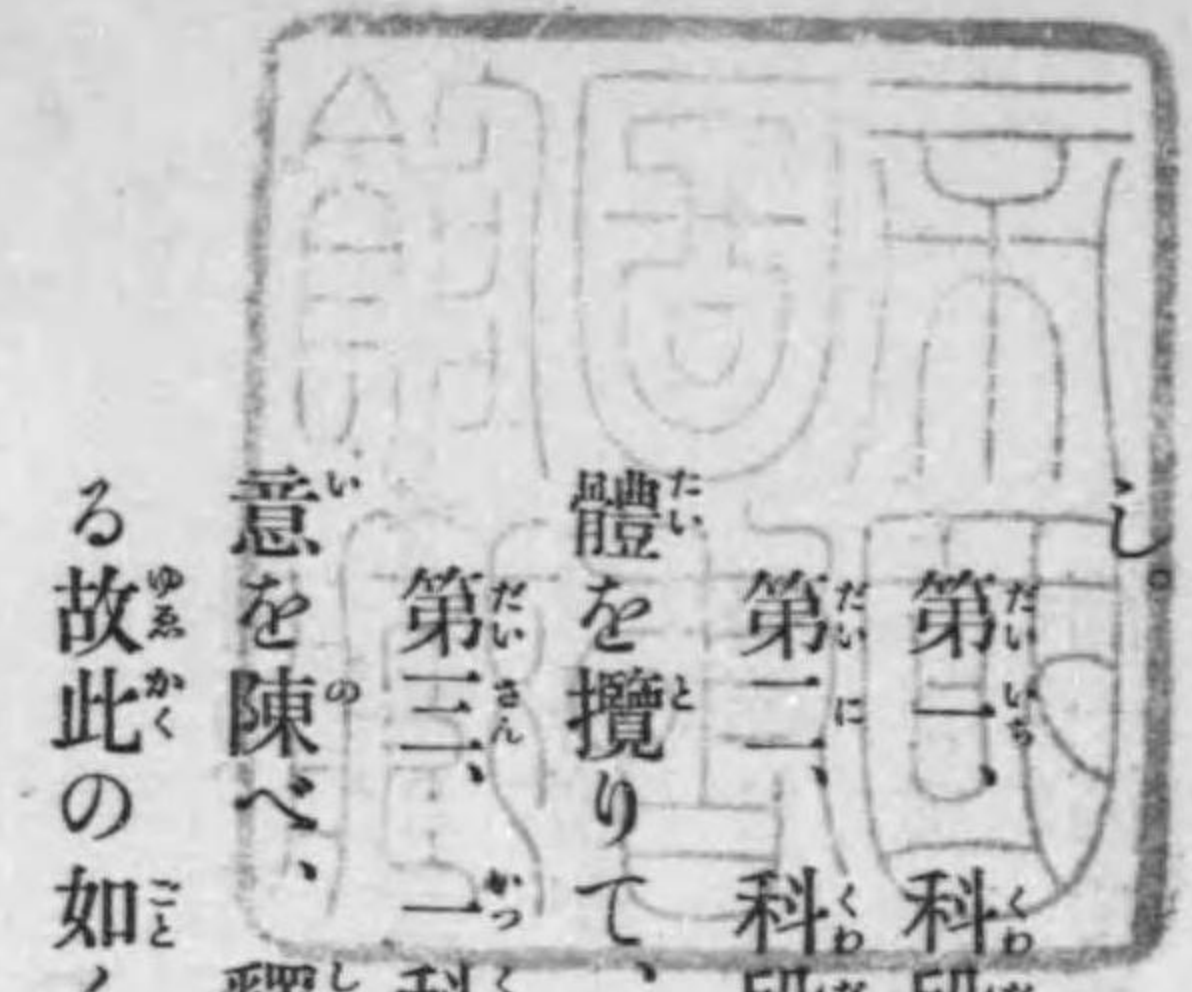
著者識



改悔文解説 上

一 緒言

此文を解説するに、左記の次第によりて、陳述することゝすべ



第一、科段を分ちて、一節一節の意味を定めて、説明すべし。
 第二、科段に入るに先だちて、文の綱領を總説し、讀者が大體を攬りて、細説に入らるゝ便利とす。
 第三、一科節ごとに、標と釋と結とを分つ、標は其一節の大意を陳べ、釋は其標したる意味を詳に陳説し、結は此いはれなる故此の如くであること斷定す。

二 科を分ち且つ總説す。

科節、又は科段と云は、「もろく」の雜行と云ふより、守り申べく候と云ふまでが、改悔文と名ける全文であつて、此全文中に、科節がある。

科節とは、全文のごこからごこまでが安心である、ごこからごこまでは報謝であるご、恰も竹は一本なれごも節があつて、一節一節で境があるが如くであるから、それを科段ごも科節ごも、又は科ごも節ごも、歎ごも項ごも云ふのである。

此改悔文の科段は、先輩多く安心、報謝、師徳、法度の四段とするごこなれごも、是は宜しきやうなれごも宜しからず。

四段に分たは、慧明院が始であるご申傳へるが、慧明院はわ

けかたが違ふ。慧明院は文前に來由、題號の二科を立て、文に對しては三段にわけて、もろくより自力のこよろをふりすててまでを、信機を明すご科し、後生御たすけ候へまでを、信法を明すごし、以下を專修を明すご科して、其中を二分して、初を正明專修ごし、かやうの御ごはり以下を、智識恩ご科せり。慧明院は、琢如上人の第五子、名は瑛兼、號を如晴と云ひ、享保七年壬寅二月七十二歳にて寂す。徳川光圀卿の招により、岩船願入寺に住職せられ、學識ありし人なりしご云ふ。第二科の信法を後生たすけたまへまでに止めたは、傳寫の誤歟ごも思はれる。

此の如き分科であるから、四分ごしたは慧明院ではない、香

月院あたりから始りたるものなるべし。然るに此文を平分して、
四科とするは輕重を失し、且つ彌陀法門の眞意を失する者考
る故、左の如く分科するなり。

全文を二つに分つ、もろくの雜行より、御たすけ治定ご存
じまでを安心ご科し、この上の稱名はより以下、終りまでを知
恩ご科す、此二分せし科を大科ごす。

之を大科ご云ふは、此分た一科の中に、又科あり、之を小科
ごす。

第一の大科の安心に二科が分れる、もろくのよりのみ申
て候までが第一小科、歸命なり、たのむ一念より存じまでが第
二小科發願廻向なり。

第二の大科の知恩に三科分れる、此上の稱名より、よろこび
申候までが第一小科、佛恩を報ずることを明すなり。此御こご
はりよりありがたく存じ候までは第二小科師恩を重ずることを
明すなり。此上は定めより申すべく候、即ち文の終りまでは第
三小科、雙て結なり。

此科節のわけかたは、先輩の分けかたご違へごも、科段是非
かくなければならぬことである。其理由は、下に至ればわかる
のである。

此の如く科節を分けた此改悔文は、何を相承なされて、蓮如
上人は之を述させられたか、是を説明するが即ち、改悔文全文
の綱領を、總説するのである。

⑥ 改悔文は、第十八願成就文を、六字釋に依て、相承なされたものなり。

⑦ 第十八願成就文を相承して、此改悔文を述させられたこと云ふは、覺如上人を承け、祖師の指教を守り、善導の六字釋に依り、第十八願成就文は、念佛行者の安心を説いた文なるを以て、之をやはらげて改悔文と爲されたので、改悔文は願成就文を日本ほんの俗語ぞくごとして、直に是衆生の安心なりと、教へさせられたものである。

相承の順序は五帖ごてう十一に、抑信心の體といふは、經に曰聞其名號信心歡喜といへり、善導のいはく、南无といふは歸命、またこれ發願廻向の義なり、阿彌陀佛といふは、すなはちその行

こいへりごあり。是願成就文を信心を教る所の眞實教として、更に言南无者の釋を引そへて、名號の相即ち信心なることを示されたもので、此願成就文を、信心を教る眞實教とせられたは、彌陀釋迦善導祖師覺師を、承られたものである。

覺師は改邪鈔末六、眞宗の門に於て、いくたびも廢立をさきこせり、廢といふは捨なりと釋す。聖道門の、此土入證得果、己身の彌陀、唯心の淨土等の、凡夫不堪の自力の修道をすてよとなり、立といふは、すなはち彌陀他力の信をもて、凡夫の信とし、彌陀他力の行をもて、凡夫の行とし、彌陀他力の作業をもて、凡夫報土に往生する正業として、この穢界をすてよ、かの淨刹に往生せよとこしつらひたまふをもて眞宗とす。又同本二

それについて三經の安心あり、そのなかに大經をもて眞實とせらる、大經のなかには第十八の願をもて本とす、十八の願にこりてはまた願成就をもて至極とす。信心歡喜乃至一念をもて、他力の安心とわほしめざるゝ故なりと、前の文は安心起行作業都て彌陀の廻向なることを明し、後の文は三經の安心の中、觀小二經の安心を方便と簡び、大經の安心獨眞實なりと決し、其大經の中にも猶十九願に至心發願欲生の安心あり、二十願に至心廻向欲生の安心あれども、此二安心は枝末にして即ち方便なり、十八願の至心信樂欲生獨根本、即ち眞實の安心なりと二重に簡び、更に第三重に、十八の願にこりては願成就をもて至極とすこせられたは、此一重は方便眞實の簡びではない、何人も是に

は不審が起らねばならぬ筈である。是に不審が起らぬやうでは、まだ他力信心を會得するまでに、距離が遠いのである。本願の三信の眞實の信心なることは、論に及ばぬことなるに、猶之を至極とせず、十八の願にこりてはまた、願成就をもて至極とすこ釋せられたは、其意を得がたいことである。彌陀自ら誓はせられた、王本願と云はれる本願が至極でなくて、釋迦の説せられた願成就文が、本願よりも至極であること云ふときは、主人よりも手代がえらいこと云ふやふなことゝなつて、本末顛倒と云はねばならぬ。何の故ありて願成就を至極とすこ釋せられたか。

是實に祖師の御已證に依て、此の如く釋されたので、亦啻御

已證のみならず、願成就でなければ、安心定得ならぬのである。
祖師の御已證とは何を指すか、曰、教行信證の四法建立である。
教は能證の教である、能證とは能く證すこと云ふこと、行信證は
所證の法である、所證とは證す所こと云ふこと、教から證される
法である。是がもし本願から證される行信證ならば、教行信證
ではなくて、願行信證の四法でなければならぬ。それを教行信
證と云はれて、謹按淨土眞宗有眞實教行信證と教卷の最初に
書せられたは、教から顯れる行信證と示して、願から顯れる行
信證と云はれぬは、即ち十八の願にこりては願成就を至極と云
されたのである。

教とは釋迦の教である、釋迦の教から聞くのが娑婆界に生れ

た我々の分限である。それ故釋迦を教主世尊と申す、依て祖師
は信卷末五六頁、横超者即願成就一實圓滿之眞教眞宗是也と仰
られてある。大經一部の宗とする、尊ぶ所は願成就の釋迦の教
である。それ故願成就一實圓滿の眞教と仰られた眞教の教が、
即ち教行信證の教なり。寺が澤山あるも、本山が大きなも、信
徒が多いも、それは眞宗ではない。眞宗の本體は願成就文であ
る、それが一實圓滿の教である。

こゝで一の不審をたて、何故願成就をそれほど尊ばねばな
らぬか、何故十八願を直に教と言はぬのか、其理由は如何であ
るか、質問する者あるべし。此質問は重要な質問で、こゝで始
めて願成就文でなくては、往生一定の他力安心が得られぬ、如

何にも教行信證とされて、願行信證となされぬ道理であること云ふことが、明白になる。

試に願成就文をすてわいて、第十八願に直接にかゝつて看よ、願文の中に彌陀廻向はありや否や、信の一念に往生定まること云ふことはここにありや、不退の位になること云ふことはここにありや、此三箇條は何れも、安心には此上なき大事件である。此外にまだ、他力信心のうけとりかたがわからぬ、乃至十念が何と心得ればよいかわからぬ、是等がわからぬやふでは、安心がきまりそうな筈がない。

元來十八願のみならず、直に願に向てはわからぬ。それを我にわかるやふに教るが、教主世尊の御役目である。依て十八願のこゝろを衆生の安心として、教へ授けられた教主世尊の教によりて彌陀の願意が得られる。それを十八の願にこりては、また願成就をもて至極とすと、釋せられたものなり。

總じて彌陀の願意を、愚惑の衆生が直に知ることは能はぬ故、必教主の教から聞かねばわからぬ。何故彌陀の願意を釋迦から聞かねばならぬか云へば、願文は多含ながら、凡慮の知り盡されることでない。餘の願で例すれば、十二の願の光明無量の願の如き、願文を見たのみでは、設我得佛光明有能限量下至不照百千億那由他諸佛國者不取正覺とあるのみで、彌陀御自身の光明の、无限量を願せられたばかりより外のことは一切見へず、然るに此願文中には、往生した人は一切光明無量を得

る、此光明は諸佛に勝れた光明なり、三惡道の者も此光明に遇へば、其命終り次第に解脱を得るなごのことが攝りてある。それはごうしてわかるか、それは願文ではわからぬ、光明無量の願成就文に、釋迦が説教させられてあるからわかる、又光明無量と云は一切の報身佛の定まりの相であるから、光明無量の願と云ふばかりでは、一切の報身佛と同様なりと思はれる、然るを光明の願成就文には、無量壽佛威神光明最尊第一諸佛光明所不能及と説てある故、諸佛の報身佛とは、最尊第一と勝れた光明と云ふことがわかる、此光明成就文がなければかゝることには皆わからぬ。往生人の光明のことも、普爲十方諸佛菩薩歎其光明亦如今也と、今我が彌陀の光明を歎ずるが如くであること説

せられてあるから、我々も往生すれば皆光明無量なることを得ることが知られる。是等の事は願ばかり見てわかることでない、壽命無量の願も亦同様で、十三の壽命無量の願を見ても、彌陀御自身の壽命無量で、我々が御相伴の出来る願とは更に見へぬ、それを釋迦の教の壽命無量の願成就文を見て、始めて往生人も壽命無量なることを知る。

是の如く因願は多含なる故、因願を直に伺ふてはわからぬ、それをわかるやうに説き教るが願成就文なり。十八願も願文を直に見てはわからぬが、成就文に至れば聞く處で往生定まるも、聞くのみで獲信の益あるも、一念即生も、不退轉の位を得るも、彌陀の廻向なることも、都て願成就文の釋迦の教でわかる。是

が五濁の凡愚をあはれみて、迦耶城に應現なされた、教主釋迦牟尼佛の我等の教主たる所以である。故に祖は教行信證として一宗を建立なされ、覺師は十八の願にござりては、又願成就を至極とすこ釋せらる。此道理に暗く、教行信證の名目を忘れ、直に十八願に向つて安心を得んとする人、第一に聞のことはりわからず、第二に廻向を知らざる如く、第三一念業成があやふやで、現生不退などは夢の如く思ふて居る。

是で蓮師が願成就文を、安心の體となされたはわかるが、其願成就に言南無者の釋をそへられたは、如何なわけであらふ、言南無者の釋は觀經下々品の十聲の念佛に就て、願行具足を釋せられた文であれば、觀經要門方便の念佛であるに、眞實教の

大經願成就と、一つものゝ如くなされるは何故であらふか。

殊に蓮師の御文は、願成就は出るけれども言南無者に比すれば甚少なく、いつも安心は言南無者で御勧めなされる。其數を云へば、願成就の出た御文は一帖の第二、同の第四、同の第十、五、三帖の第六、四帖の第一、五帖の第十一の六通で、其中を分れば、純粹に願成就のみを引れたは一帖の二通のみで、其他は言南無者と共に引てある。然るに言南無者は釋文のあるもの、ないもの、あれども、言南無者の釋義の如く、二字四字の意義其儘になされてあるの合せ數ふれば、四十一通の多きに及ぶ。是で觀れば蓮師は、願成就より却て言南無者を重しこせられたやうである、此蓮師の教へかたは如何のわけであるか。

是をわからせるが、御文を心得る第一必要のこころである。是
がわからねば遺徳記三、祖師聖人よりこのかた、一念歸命のこ
ころはりを勧むといへども、念持の義を教へず。爰に先師上人こ
の義を詳にして、無智の凡類をして、明に難信金剛の眞信を獲
得せしむることを致す。實に是先師上人の恩徳なりとあること
は、何の事やらわからぬのである。此文の中の念持と云ふこと
がわからねば、御文はめちやくちやである。

以下は言南無者の釋が、成就文と同一意義であること、念
持の義とはいかなることであるかを説明すべし。改悔文も此念
持の義で、言南無者の義なり、願成就の意なりであるから、此
説明は殊に注意してほしい。

先づ言南無者が、願成就の意であることから説明する。是も
相承の次第を正しくせねばならぬ故、蓮師より覺師、覺師より
祖師と遡りて、説明することとする。

蓮師は御文三帖六、五帖十は、共に願成就と言南無者を一つに
しての御教化であれば、蓮師は願成就と言南無者を、同じ眞實
教同一味の安心となされたは明白である。覺師は此願成就と言
南無者の二文を、いかに見させられたか。

覺師一生の主張であつて、眞宗の正義を傳へて、祖師の教を
明になされたは、願成就文をもて一宗の安心と定め、一念業成
の義を確然不動となされた事で、覺師なかつたなら、一念往生
平生業成の義は、いかになつたかも知れぬと思はれる。それ故

異解者の多くは覺師を喜ばぬ、口稱募などは最も喜ばぬ、眞宗の學者で、若し覺師の相承をぬきにして、祖師へ直にいつたなら、恐らく間違を生ずるであらふ。祖師の教を水際を立て、脇道へまぎれこまぬやふにせられたが、覺師の釋であるから、覺師の釋は十分に意を用ひて、伺はねばならぬ。

覺師が願成就と、言南無者を一つとして釋せられたは、執持鈔二云、平生の時善知識のこころばのしたに、歸命の一念を發得せば、そのこころをもて娑婆のわはり臨終と思ふべし。そもく南無は歸命、歸命のこころは往生のためなれば、またこれ發願なり。このこころあまねく萬善萬行をして、淨土の業因となせば、また廻向の義なり。この能歸の心、所歸の佛智に相應するこころ

かの佛の因位の萬行、果地の萬徳こころく名號のなかに攝在して、十方衆生の往生の行體となれば、阿彌陀佛即是其行と釋したまへり。此文歸命の一念と云ふが、既に願成就と言南無者を一つになされてあり。歸命は言南無者の言ばで一念は成就の言ばなり。然れば成就の信心歡喜を、歸命と同一とせられたものなるこころ明なり。其時をもて娑婆の終り等とあるは、成就の即得往生で、其時と云ふは信樂開發の時尅の極促なり。善知識の言ばとあるは、覺師の外の聖教の言ばにてらこあはすれば、本願鈔に、黒谷の聖人空より、本願寺の聖人、親相承します所、報土往生の他力不思議の信心を、善知識ありて、つたへこきて授るを、行者きうるによりて、文の如く、一念歡喜の

たもひおこるについて、往生たちごころにさだまるごある、是願成就をつたへきかしむるを善知識とせらる。是が願成就なるここを知るは、文の如く云て、一念歡喜とあれば、願成就なること論なし。文の如くは、願成就の文の如く云ふなり。又願々鈔にはその名號をきくといふは、善知識に開悟せらるゝ時分なりと云ひ、最要鈔には聞其名號といふ、聞は善知識にあふて、如來の他力をもて、往生治定する道理をきゝさだむる聞なりと云ふ。此例によれば、平生のこき善知識の言のしたに云ふ、善知識のこきは即願成就を教へる言である。それを言南無者を引合せて、平生業成の義を成立なされる。覺師は右の如くであるが、祖師に在ては如何であるか、是も

亦言南無者を願成就の意となされてある。行卷六要會本二四十四、言弘願者如大經說の文、言南無者の全文を一連に御引用なり。如大經說の文一連御引用なれば、大經の説と同一と見させられた祖意なることは明で、況や方便説は一切御引用なき、眞實行の卷に御引用なれば、大經の中の名號の釋、即十七願の諸佛讚歎の位と見させられたは無論である。それより下に至り同卷四十、言南無者の私釋ありて。是以歸命者、本願招喚之勅命也、言發願廻向者、如來已發願廻施衆生行之心也、言即是其行者、即選擇本願是也、言必得往生者、彰獲至不退位也、この御釋、竝に尊號眞像銘文末、言南無者といふは、南无はすなはち歸命と申すことなり、歸命は即ち釋迦彌陀二尊の勅命にしたがひめしに

かなふと申すことばなりこの御釋で明である。

行卷では、歸命を本願招喚の勅命と云ひ、發願廻向に衆生行を廻施すと云ひ、即是其行に選擇本願と云ふ、是皆弘願を明す言ばである。弘願は善導の玄義分に、言弘願者如大經説と釋されて、觀經には弘願は説かぬ。それなれば觀經は何を説くか、それも善導は、觀經は要門を説く、要門は定散二善なりと、大觀二經と要弘二門と相對して、觀經は弘願を説かず、弘願は大經に説くと分判してある。それにも拘らず、此言弘願者如大經説の文を、此觀經も大經の如く、弘願を説くと云ふことなりと云ふ人もあるそうだが、それはごんだことで、之を釋なされた序題門の文脈がわからぬ、又説と云ふ意義がわからず、又何の

爲に行卷御引用なされたかもわからぬのである。弘願と言へば必大經であるは、定まつた法門の規則である。猶又招喚として、因願なれば欲生のこと、二尊なれば、願成就のことである。二河白道には東岸西岸と分てある故、釋迦に發遣と云ひ、彌陀に招喚としてあれども、其招喚を一心正念としてある、一心は成就の一念なり。こゝに成就の意を招喚の聲となされたは、成就が釋迦の發遣也、又彌陀の招喚也と知らせる意也。故に愚禿鈔には、一心正念を釋して、一心言眞實信心也、正念言選擇攝取本願也、又第一希有行也、金剛不壞心也と云ふてある。是は二重の釋をなされたの故、又の又隔の言がある、前は信行次第で、後の釋は行信次第也。信行次第は本願の次第、行信次第は成就

の次第なり。是彌陀の招喚なるも、釋迦より聞くのであるの意を示す。故に信行次第の本願の意の時も、眞實信心云ふ信心は即ち成就の言ば也、廻施云ふも、願成就の至心廻向なり。必得往生の釋に至りては、いかなる人も異論すること能はざる願成就の意なり、言必得往生者彰獲至不退位とある、不退の位に至るは願成就文なり。更に其次下に經言即得とある、是亦願成就文なり。

又銘文では歸命を釋して、釋迦彌陀二尊のわほせにしたがひめしにかなふと申す言ばなりとあれば、二尊一致を顯す釋なり、然れば無論願成就の意なり。殊に歸命は南無の釋なれば、彌陀が成就なされた名號中のこと也。それに釋迦が加はりてあるは

妙なことなり、又彌陀釋迦の次第なるべきに、釋迦彌陀の次第なるも奇なり、是皆彌陀の意は釋迦に依て聞く、それは願成就文なるを顯す意なり。

祖師が言南無者を御覽なさるゝは、行卷御引用一也、行卷に御私釋あること二也、銘文に二尊一致として御釋ある三也、此三通りの御扱のなされかたが、願成就の意として御扱なされるのであれば、覺師、蓮師は此祖意に相承なされたものである。以上の次第なる故、祖師、覺師、蓮師、何れも言南無者を願成就文の意とされる。是て願成就と言南無者と、同一意義の御取扱であることは辯じ了りたゆへ、以下は御文が何故言南無者を多く御引用、又言南無者のことろでの御教化のみであるか

の理由を述べて、念持の義を説明することゝしやう。但し念持の義を先にした方が、説明に便利ゆへ、先づ念持の義を説明すれば、隨て言南無者を主として、蓮師の御化道のころが善くわかる。

元來言南無者の釋が、念持の義の釋である。善導は、散善義即ち顯の義の方の、下品の念佛を、散善義で釋なされずに、玄義分で釋せられたは、散善義當分の顯の義でなく、觀經の流通附屬の文の、汝好持是語持是語者持無量壽佛名とある、弘願の意で釋なされたものなり。

その言南無者が、念持の義であるは何故か云ふに、善導は釋迦が附屬なされた、持無量壽佛名の、佛勅にしたがはれたの

で、持無量壽佛名の持が即ち念持なり、此附屬文の佛勅に順はれたとは何を以て知るか、それは善導が此附屬文を釋せられた言でわかる、善導此附屬文を釋して曰、從佛告阿難汝好持是語已下、正明付屬彌陀名號流通於退代上來雖說定散兩門之益望佛本願意在衆生一向專稱彌陀佛名と、此佛の本願に望めて見れば、釋迦の意は定散二善を勧めるは本意でなく、一向專稱彌陀佛名を勧めるので、それを持無量壽佛名と、說せられたのであると言ふ善導の釋なり。此持無量壽佛名が、即ち言南無者の釋なり。持は念持の義なる故、言南無者が、念持の義の教で、釋迦の附屬に順ふた釋義なり。此附屬文の釋の、一向專稱とあるも、念持の義で、一向は御文に、一心一向に彌陀をたのむ等

の言多ければ安心の方なり、専稱は後念相續の相なり、その一向の安心の方を、言南無者等と釋なされたものである。

念持の義とは、念は憶念の義、持は執持の義なり。大經には信樂受持とよき、觀經には持無量壽佛名とよき、阿彌陀經には執持名號とよく、此持と云ふは即ち念持である。念持の言は口傳鈔上六、此教にあふと雖念持せざればまたあはざるが如しとあり、此念持の義を蓮師御化導の儀式となされたことは、前に舉た遺德記の如くである。遺德記は蓮師の第十六子蓮悟の著述で、第二十三子實悟の執筆である。然れば蓮師の御化導は念持の義の御勸めであつたと云ふことは、御弟子皆心得て居たことと見へる。

念持の義に就て遺德記の云ふ所に據れば、祖師以來一念歸命のことは、御勸なされたれども、蓮師に至るまでは、念持の義の御勸はなかつたので、それを蓮師が此念持の義を詳にして、教させられたが蓮師の徳であつて、此念持の義を教させられた故、愚鈍の者が難信金剛の信樂を、心得やすく得られた、是が蓮師の恩徳であるこの事なれば、祖師以來念持の教はなかつた、それを蓮師が教させられたと云ふ事なれば、爰に二種の不審がある。

一は祖師已來教させられぬ念持の義なれば、蓮師の安心は祖師や覺師と違ふてはたらぬか。二は若し祖師と違はぬならば、何故蓮師は祖師になき、念持の義を御勸なされたか。此二條の

不審なり、此外に念持の義で心得やすく、信が獲られるやうになつたごあれば、祖師の勸はむつかしい教かこの不審もあれごも、それは此二條の不審がわかれば随てわかる。

是は立義門と、勸信門の差別である。例せば元祖の立義門は一願建立で、祖の立義門は五願建立であるから、立義門は元祖吾祖同じからぬ、併し勸信門は、二祖共に疑を誠め信を勧める、蓮師が念持の義をもて、勧めさせられるは立義門である。それ故遺徳記は、一念歸命のことはりなる勸信門の方は、祖師以來の勸であるご云へり、即ち立義門では差別あるも、勸信門にはかはりはない、其差別は、祖師は願成就に據て義門を立させられ、蓮師は言南無者に據て義門を立させられる、それ故蓮師は、時

時願成就を御引用なされるも、言南無者の本據として御引用なされるので、蓮師御化導は一代を通じて、言南無者の御勸である。

是が祖師と蓮師との義門の差別であるが、随て御言にも幾分の差別がある。祖師は必信せよと勸させられ、信じやふを教させられる。覺師が祖師の御勸を舉似して、信心歡喜乃至一念をもて、他力の安心ごたぼしめさるゝゆへなりご仰られた通り、信心歡喜乃至一念が祖師の御勸である。それ故一多證文に、選擇本願の尊號無上智慧の信心を聞て、一念も疑ふごよろなければ、眞實信心ごいふご仰られ、又唯信文意には、釋迦は慈父彌陀は悲母、われらがちよはよごして信心を教たまへりご示され

て、信心を説聞せるが祖師の教かたで、それを覺師は本願鈔に、黒谷の聖人より本願寺の聖人、相承しまします所の他力不思議の信心を、善知識ありて傳へ説て授るご仰られた、いかにも此通りであつて、祖師の教は信ぜよご云ふ外はない、信心歡喜乃至一念を他力の安心と思召るゝご、御遺訓の上に歴歴ごして見へてある。是祖師の立義門は、願成就を教させられる義門なるが故である。

蓮師の立義門は、言南無者を據證させられて、念持の義門で教られるのであるから、たすけたまへご彌陀をたのめご教させらるゝ、たのむごいふごは歸命のこゝろなるごは、祖釋に據らせられるので、行卷言南無者の私釋に、よりたのむなりの

左訓が其據證である。言南無者をもて義を立てさせられたのであるから、御文の御勸は一切、言南無者の義門に據らせられてある。

立義門は、願成就文ご、言南無者ごの差別はあれごも、勸信門の方では、全く同一である、何故ごなれば、言南無者は弘願の意の釋なる故、全く願成就文の釋迦の教に依らせられた善導の釋なる故、願成就ご言南無者ごは用字の上の差別はあれごも、歸命は信心歡喜乃至一念なり、發願廻向は至心廻向願生彼國即得往生住不退轉である、字は違ふてあれごも意は一つである。信ごたのむごは同義なり、何を以て知るぞなれば、和讃に、佛智疑ふ罪ふかし、この心たもひしるならば、悔るこゝろをむ

ねごして、佛智の不思議をたのむべしごある、此たのむは經文の、明信佛智のこを仰られるのであるから、祖は信ごたのむごを同義ごせられるのである。又銘文に世親菩薩、かの无礙光如來の願行を信じて、安樂國に生れんと願たまへるなりごある、此无礙光如來の願行を信じてご云は、歸命盡十方无礙光如來ご云ふ言を、やはらげさせられた文なれば、信じてごあるは歸命のこごなり。和讃では經の信をたのむご仰られ、銘文では論の歸命即ちたのむごあるを信じてご仰られる。此の如く信するごたのむごは、互に通じて仰られてあれば、信ごたのむごは祖釋に在ては一つなり。然ば蓮師が立義門の言南無者に依て、歸命のこごを以てたのむご仰られたも、祖師の信ぜよご勸させら

れたも、更にかはりはない。

故に蓮師も三帖四、なにのわづらひもなく諸の雜行雜善をなげすて、一心一向に彌陀如來をたのみまいらせて、ふたごゝろなく信じたてまつれば、そのたのむ衆生を光明をはなちて、ひかりのなかにたさめいれたきたまふなりご云へり。三帖二には、先づ南無ごいふ二字は、いかなるごゝろぞごいへば、やふもなく彌陀を一心一向にたのみたてまつりて、後生たすけたまへごふたごゝろなく信じまいらすごゝろを、すなはち南無ごは申なりご云ふ。蓮師も亦たのむご信するを、同一ごせられたり。

此の如くであるから、祖師ご蓮師ご言の上にかはりはありて

も意にかはりはない、其言のかはるは立義門の違ふので、勸信門の違ふのではない。是で二條の不審は大體答へたのであるが、まだ明ならぬは、蓮師は何の必要ありて、祖師になき念持の義といふ立義門を別立なされたか、又何故に念持の義なれば安心がこりやすいかの二項である。

以下は念持の義を明にして此不審を解くべし、念持即ち憶念執持の義を、蓮師は何の必要の爲に用ひられたか、此意味は御文處々に出てある、四帖六、されば信心といふも別のこゝろにあらす、みな南無阿彌陀佛のうちにもりたるものなり、ちかごろは人の別のこのやうに思へりこ仰られた、是が念持の義によりて御化導なされた主意である。五帖三にも、されば信心

をこるこいふも、この六字のうちにもれりこしるべし、さらに別に信心にて六字のほかにはあるべからざるものなりこある、此六字の外に信心ありと思ふ病を、退治する良法良薬として、念持の義を以て教させられたのである。

此蓮師の御言のうち、近頃は人の別のこのやうに思へりこあるは、眼をつけねばならぬ御言である。近頃こあれば祖師や覺師の頃は、信心を六字のうちにある、信心こ皆心得て居たものなるに、近來はそれが、六字の外に信心をこしらへやふこするもの、又は六字の外に既にこしらへた、手作り安心もある、それは祖師の教させられた他力信心ではないぞよこ、信心が六字の内か外かで、自力他力を別させられるが蓮師の大主意で、

それには念持の義が最も能く心得られるから、念持の義で教させられた。

四〇

此信心が六字の内か外かは、眞宗に於の大問題である。聖人の御信心も他力よりたまはらせたまふ、善信が信心も他力なり、故に等しくしてかはる所なきもあるも、信心のかはるご申は自力の信にこりての事なり、即ち智慧各別なるが故に信また各別なり、他力の信心は善惡の凡夫ごも、佛の方より賜る信心なれば、源空が信心も善信房の信心も、さらにかはるべからずたゞ一つ也御傳鈔この、同一味の信心は、六字の内にある信心なれば同一味なれごも、之を六字の外とした人は、六字は口に稱へる名號、信心は心から起す信心とするので、六字が彌陀の廻向、

廻向の六字の中の信心であるといふことを知らず、自力のはからひのすたらぬ人、廻向のことはりのわからぬ人の信心は、皆六字の外の信心となるのである。

それはわからぬでないか、六字は彌陀の廻向とは聞て居るが、廻向の名號じやから信心が六字の中にあるご云ふごきは、信心は六字の中に在るので、衆生の心の中に信心はないのゝやふである、それでは衆生は往生は出來ず、廻向の六字が往生するやうなごに思はれるご云ふ愚難があるが、それ故念持の御勸である。

此蓮師の仰られた、近頃は人の別の事のやふに思へりごある、六字外の信心ご思ふ人は、蓮師の時よりは、今は一層甚しくな

つて、信仰なごいふ言が流行して、廻向の信心の規矩は、古書の套語、古人の餘唾として、ありがたい心になつたごか、殊勝らしくなつたごかを信心のやふに心得て、大多數の人は皆六字外の信心を、製造するにかゝりはてゝ居るやふに見へる。是は蓮師の教の念持の義がわからぬからであつて、此大悪弊の盛な時に當りては、念持の義は起死回生の神薬と云ふべき者である。遺徳記がなかつたなら、迷者をさごすに殆ど方法なきに近いと云はねばならぬのが、幸に遺徳記があつて念持の義の、蓮師の最大注意から立たせられた義門で、難信の信が得やすきごこまで記し傳られた故、蓮師滅後四百年、猶此念持の義なる一語が、氣絶した人に活を入れるが如き、現前の利益に預るごこが出来

るのである。若も此遺徳記の記録なく、御文の深意を解さず、漫に一語一句に拘泥して、勝手な解釋を以て御文を見たならば、蓮師の苦心はむだごこゝなり了るであらふ。

元來念持の義は、大經の信樂受持、觀經の持無量壽佛名、小經の執持名號なるは既に言ふたごこであるが、其執持名號は略文類に、經言執持名號、執者心堅牢而不移、持者名不散不失、故曰不亂執持即一心、一心即信心、然則執持名號之眞説、一心不亂之誠言、必可歸之特可仰之とあれば、眞宗の安心に通じた學者ならば、遺徳記なくごも御文の御化導が、念心の義なるごこは直に了解すべきごこであるが、讀書はいかに博くごも、念持の何なるかのわかる人が少ない、是がわからぬから蓮師の御勸

が、祖師ご同一でないやふに見へて、たすけたまへこたのむは古來多く、自力信に用ひた語であるとか、眞宗空前の新説なごこいふやふな、妄言を吐く者あるに至る、是は畢竟念持の義がわからぬから起るのである。

念持の義は前に云ふが如く、信樂受持等釋迦世尊の佛語である。之を和解すれば名號を持てこいふこと、名號をたもつことは如何にすることか、小經には更に執の字を加へて執持せよごある、執持を祖師は、執は心堅牢にして移らずご釋せられたり、持つごは心に持つごご、心に持つごご故、心堅牢にして移らずご釋され、又讚には恭敬の心に執持してご仰られた、口に稱へるを持つご云ふやふに心得る者もあるが、それは心に持つごので

ないから、祖釋に違する。

然らば心が堅牢にして移らぬごは何ごすることか、曰、大經には受持ご説てある。受持は正しく心に受取て持つごいふので、受持は名號を持つ初に就て受ご云ひ、執持は受取た上に、心のかはらぬ邊から執持ご説せられたので、受持は執持の始め、執持は受持して移りかはらぬを云ふたもの、さて其受持も執持も皆他の教を聞く故、受持ご執持せられるの故、大經では聞斯經信樂受持ごあり、小經では聞說阿彌陀佛執持名號ごありて、大經に斯經ごあるは能説の方から云ひ、小經に阿彌陀佛ごあるは所説の方から云ふたもの故共に名號のごご、即善知識が名號のいはれを説くのであつて、此所説の名號のいはれを、いはれの

如く領納して、其領納した心が堅牢にして移らぬが執の字のころ、持は不散不失なれば相續して不斷なるを云ふ、即ち憶念の心つねなるなり。之を和解すれば聞た名號のいはれが心に領納せられて、憶念の信となりて相續することなり。六要鈔會本九五に、執持を受持で釋なされて執持等とは智度論に云、信力の故に受け、念力の故に持つ、寂師大經義記下に受持の義を釋して、受は心に領納を作す故に、持は記を得て忘ざるが故に以上六要ノ釋ナリ寂と釋してある、記を得ては念の定義が明記に師トハ義寂ヲ云フと釋してある、記を得ることを他の事にて例不忘と云て、紙の上に書付たやふに、心の上に受取られたといふことを記を得て云ふたもの、記を得ることを他の事にて例して云へば、雪はつめたいもの火はあつたいものといふことは、

何人も心に書きつけてあるやふになつて在る、それが記と云ふものであつて、雪のつめたいことを忘れやふと思ふても忘れるといふことは出来ぬ、火といふものはつめたい物であつたか、あつた物であつたか、こんど忘れてしまふたといふことはない、それが明記不忘といふものである。それが如く名號のことはりが心に受取られて、一念往生治定と明記不忘になつたが領納なり、受持なりである。それが名號のことはりて、自分の往生は定るやふにも思はれ、定らぬやふにも思はれるやふでは領納せぬのである、受持せぬのである、故に明記不忘にはならぬ。それを南無したのむ一念に、往生定まることと自分の上へ引受られたが受とつたので、其受取た心が火のあつたいを記し、雪

のつめたいを記して居る如く、心に相續して在るが、憶念ごも明記不忘ごも云ふので、それが受持なり執持なり念持なりである。

それ故に御文では、いつも名號のいはれて御勸なされる。或は名號のいはれご前に仰られてない御文もあるが、それも名號のいはれを安心ごして、御勸なされる改悔文もその通りで、諸の雜行雜修より御たすけ治定までは名號のいはれ、それが善知識の教から耳に入り、心に受取られて行者の安心ごなつたのである。是が名號のいはれなり、ごはりなりで、それが聞受られて我安心ごなつたのであるから、此御ごはり聽聞申わけ候ご申述るのである。此御ごはりごは名號のごはり、それが

我往生成佛のごごはりご聽聞申わけたので、是が全く念持の義の御勸である。

問、念持の義は大略わかつたが、それに付て祖師は願成就に據ての御勸ご云は、願成就は念持の義でないのであるか。

答、願成就も亦念持の義である。さりながら蓮師の御化導は、名號を直に釋して、善導が南無ご云ふごは歸命である、亦それに發願廻向の義がある、阿彌陀佛ごいふは、淨土の佛のごごでなく、即ち其廻向してくださるゝ行であるご、名號を直に行者の安心ごして釋なされた、それを傳させられる蓮師の義門であるから、名號念持の義ご云ふのである。

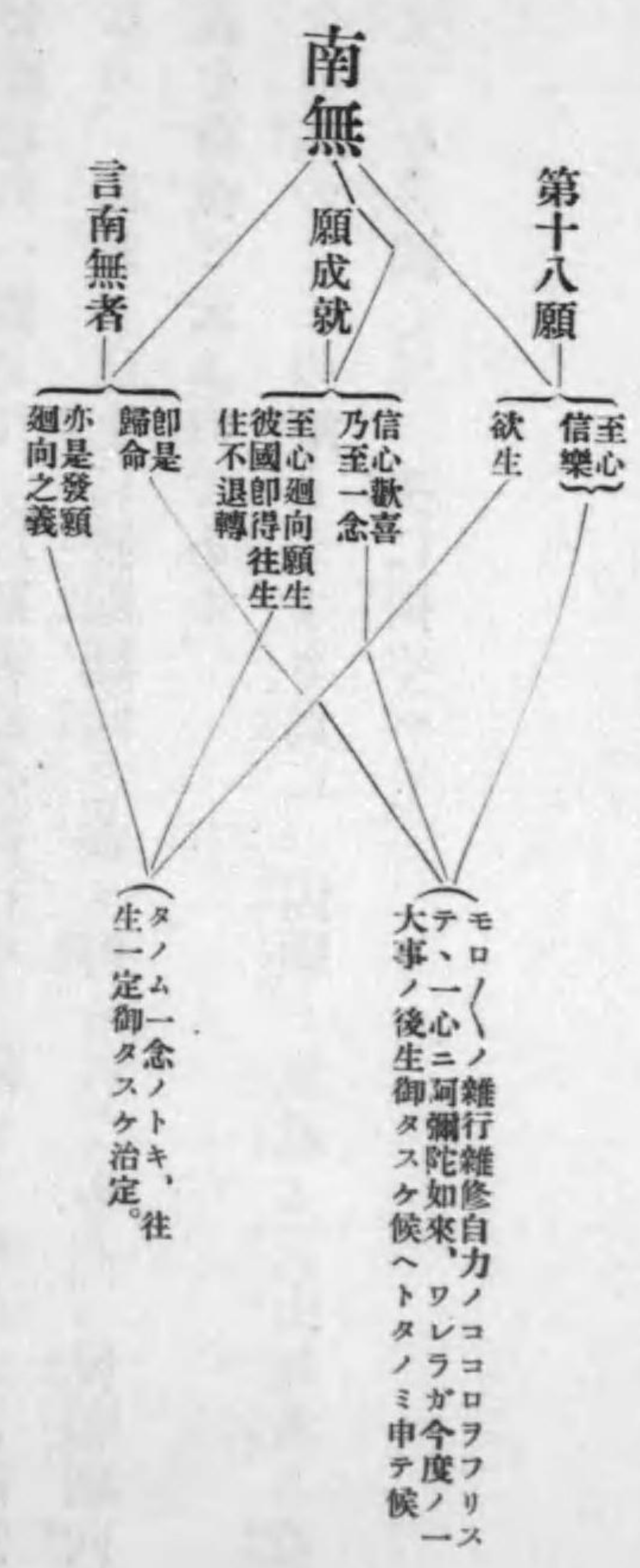
願成就文は、善導の言南無者の手本であるから、念持の義で

五〇
はあるが、南無といふは阿彌陀佛と云ふは、直に名號のいはれを説きほごいた文相になつてないから、念持の義は云はぬのであるが、念持と同じ授けかたになつてある。それ故付屬文では、信樂受持と説せられてある。

念持と同じ授け方は、信心歡喜乃至一念は歸命である、至心廻向願生彼國即得往生住不退轉は、發願廻向である、然れば願成就文は、南無阿彌陀佛の中の南無の二字なり、阿彌陀佛の四字は如何なるかと云ふに、是は阿彌陀佛の四字は廻向したまふ品物、即ち大善大功徳と云はれる行である、此行は能廻向の至心廻向にたさめて、衆生に廻向したまふ故、行は信にたさまつてある、それ故信心ばかりで往生成佛の利益が得られるので、

御本書の信の直ぐ次が證になつて居るが此いはれてある。信心の正因一つで、往生成佛する説せられたは、此願成就文である。そこで善導は之を相承して、南無の二字を歸命と發願廻向の二つとて、阿彌陀佛即是其行は所廻向の行なる故、能廻向の發願廻向へ撮めて、以斯義故必得往生と釋せられたが言南無者なり、斯義は上に發願廻向之義と仰られてある、發願廻向の義を斯義と云ふのである。

今前述のこの解しやすき爲に、因願と成就と言南無者と改悔文を畧圖して、次に掲ぐべし。



南無阿彌陀佛の名號は一名號であつて、二つの物をつぎあはせたのではない故、二字と四字とは離れたものでない、それ故二字を離れた四字なく、四字を離れた二字はない。さりながらそれではわからぬから、わかりやすい爲に善導は、南無は信で

願を具す、信は手段、願は目的なる故、信に願を具して、南無の二字なりと釋し、阿彌陀佛は行と釋して、信願行満足の廻向の名號なることを、顯したが言南無者の釋なる故、阿彌陀佛即是其行を、因願に配すれば乃至十念である、それを祖師は、言即是其行、即選擇本願是也と、釋なされたものである。二字を離れぬ阿彌陀佛即是其行なる故、乃至十念の誓の名號なり。

此理由なるが故に、信心を六字の外に如く心得た、心得違の者も南無と云は歸命と、歸命と云は疑なくたすけたまへこのむ信心ぞ、發願廻向はたのむ衆生をたすけたまふいはれぞ、是やがて阿彌陀佛の四字のころぞと、教させられるときはいかなる者も、彌陀をたのむ心は六字の中の、南無歸命の心である

ご知られる。六字の中の南無歸命の心ご知れば、六字の外の信心ごは何人も思はぬ筈である。此六字の中に在る信心ごを教させられるは、六字の彌陀の名號なれば、行者の手作り安心でないことがわかる。彌陀廻向の信心なることがわかる。是を知らしめる爲に、善導の言南無者によりて義門を立て、六字の中に在る信心なるぞ、歸命は彌陀をたのむ心なるぞ、是が信心であるから信心は六字の中に在るぞ、此教を信受したのが即ち、彌陀の廻向が受取られたのである。此の如く決定したが、所聞の名號のここはり其まゝが、耳から入て衆生の安心ごなつた、是が廻向の信心なりご、名號のここはりを聞て領納信受した、即ち名號念持の安心なりご教させられたのが、蓮師の念持の義門

の御化導である。

④ 右の如くなるが故に、凡夫の妄想妄念の心をつくらひなをし、殊勝らしくするたのむ心でなく、たすけたまへごいふことも、凡夫の念想を起して、たすけたまへごいふ念想を發すのではない、此念想は皆意業であつて安心でない、意業は行であつて信でない、安心は憶念の信である、憶念の信は、聞たいはれをいはれの如く心得わけたのが憶念の信である。

今は名號のここはり、いはれを聞わけたれば、全く衆生の安心であつた。此安心に同心したのが名號念持なり。同心した時が即ち彌陀廻向の信が我物になつたので、それを信樂受持ごも、執持名號ごも、持無量壽佛名ごも、説せられたのである。

願成就文は、南無は何、阿彌陀佛は何と、註釋的になされた説相でないか、阿彌陀佛の行を至心廻向にたさめて、六字を安心として説相なる故、直接の念持の義は見へぬも、念持と同義なることは、流通に至りて若聞斯經信樂受持と説せられてあれば、受持と念持は同義なるが故に、愚鈍殊に、信心を名號の外に在る如く心得た人に對しては、言南無者の註釋的に教へられたを、適切なりとして、念持の義を以て教させられた。以上蓮師は願成就を根本として、善導の言南無者を相承し、念持の義を以て、御文は勿論此改悔文を述させられたと云ふ次第を辯じ了る。

二 入文 二二

初 大科第一 安心

大科第二 知恩

大科第一 安心 中 爲 二一

一 歸命

二 發願廻向

是より歸命を述る

もろくの雜行雜修自力のころをふりすて、一心に阿彌陀如來、われらが今度の一大事の後生、御たすけ候へごたのみ申て候

是は歸命のころなり。

此改悔文は、本願寺派には領解文と云ふ。此もろくのこ

云ふより、御たすけ治定ご存じまでが安心なり、即ち名號念持の義で、言南無者の釋により、願成就文のこゝろを相承して、述させられたものなり。

釋 改悔ご云ふこゝろは、改め悔るご云ふこと、正像末和讃に、佛智疑ふ罪深し、この心たもひしるならば、悔るこゝろをむねごして、佛智の不思議をたのむべしとの意に依て、名つけたものご見へる、即ち廻心ご云ご同じ。歎異鈔に一向專修の人に於ては、廻心ご云ごたゞ一たびあるべし、其廻心ごは、日頃本願他力眞宗を知らざる人、彌陀の智慧を賜りて、日頃の心にては往生かなふべからずご思ひて、もごの心をひきかへて、本願をたのみまいらするをこそ、廻心ごは申候へごあるが、即ち改悔のこ

ころなり。もごのこゝろごは、雜行雜修自力の心なり。本願をたのみまいらするごは、一心一向にわれらが今度の一大事の後生、御たすけ候へごたのみ申て候ご同じ。

諸の雜行雜修自力のこゝろをふりすてごは、雜行は五正行の外を行を云ふ。五正行ごは善導の散善義の、就行立信の釋の中に、行に就て信を立るごは、然るに行に二種あり、一には正行、二には雜行なり、正行ご云は、専ら往生經大經觀經に依て行を行する者を、是を正行ご名く、何者か是なるや、一心に此觀經彌陀經無量壽經等を讀誦し、一心に專注して彼國の二報の莊嚴を思想し、觀察し、若禮するには即ち一心に専ら彼佛を禮し、若口に稱するには即ち一心に専ら彼佛を稱し、若讚歎し供養す

るには即ち一心に専ら讚歎し供養す、是を名けて正爲す、又此正の中に就て復二種あり、一には一心に専ら彌陀の名號を念じ、行住坐臥に時節の久近を問はず、念々に捨ざる者を是を正定業と名く、彼佛願に順するが故に、若し禮誦等に依るをば即ち名けて助業と爲す、此正助二行を除きて已外の自餘の諸善をば、悉く雜行と名くこあるが、雜行の釋の始めである。

是を和讚に、淨土の行にあらぬをば、ひとへに雜行と名けたりこ仰られてある。それなれば淨土の行でない行は、一切雜行なり。其淨土の行は何々であるか、それが今の善導の釋の五正行である。善導の言ばではたゞ正行と云ふてある、それが上に引く如く五つある、一に讀誦正行、二に觀察正行、三は禮拜

正行、四は稱名正行、五は讚歎供養正行、是が淨土の行なり。讀誦は三部經を讀誦すること、觀察は彌陀の淨土の依正を觀察す、禮拜は彌陀を禮拜す、稱名は彌陀の名號を稱すること、讚歎供養は彌陀を讚歎供養すること、是が淨土の行で、此外は一切雜行である。

雜修と云は和讚に、助正ならべて修するをば、すなはち雜修と名けたりこあつて、助正とは正業と助業のこと、是も上に擧た善導の釋に、此正の中に復二種ありと云ふから下が、助正二業の釋なり。前に五正行として五つに開いてあつたのを、今は合して正業助業の二つとして、稱名の一つを正定業即ち正業として、禮拜讀誦觀察讚歎供養を一つにして、之を助業と名け、

助業じよこふ云いふは稱名しやうみやうする爲ための補助ほじよの行業ぎやうこふで、往生わうじやうの業因ごふいんでないこと定さだめ、往生わうじやうの業行業因ごぎやうごふいんは唯稱名たゞしやうみやうばかりにして、是これが佛願ぶつぐわんに順したがふのである故ゆゑ、正定業しやうぢやうごふはたゞ念佛一行ねんぶついちぎやうに定さだられたものなり。それを心得こころあやま誤りて、禮拜らいはいも讀誦どくじゆも觀察くわんさつも讚歎供養さんだんくやうも、稱名しやうみやうと肩かたをならべた往生わうじやうの業行業因ごぎやうごふいんと思おもふてつごめるが、助正じよしやうならべて修しゆするので、是これが雜修ざつしゆ云いものである。此外このほかに現世げんせのりをする者ものも雜修ざつしゆである、和讃わさんに佛號ぶつがうむねに修しゆすれども、現世げんせをいのる行者ぎやうじやをば、これも雜修ざつしゆとなつてぞ、千中無一せんちゆうむいつときらはるゝこ仰おほせられてある。

自力じりきのこゝろは、自力じりきはひろくかゝる、雜行ざぎやうも雜修ざつしゆも自力じりきの心こころから起おこる。それ故畧ゆゑりやくして云いこきは、自力じりきのこゝろをすてる

一つで云いても、雜行ざぎやう雜修ざつしゆをすてる義ぎはたさまる。今いまは雜行ざぎやう雜修ざつしゆの言ことばありて、其上そのうへに自力じりきの心こころある故ゆゑに、自力じりき念佛ねんぶつ疑心ぎしん不決ふけつのこゝろである、即すなはち二十願にじふぐわんの機きなり、雜行ざぎやうもすて、雜修ざつしゆもすてたれども、念佛一行ねんぶついちぎやうとなりながら、まだ順ズルガノ彼佛願たがひに故ゆゑの意こころがわからぬ、佛願ぶつぐわんは第十八願だいじふはちぐわん、十八願じふはちぐわんの中の稱名しやうみやうは、言いふまでもなく乃至十念ないしじふねんのこゝろ、乃至十念ないしじふねんは十聲じゆしゆの者ものも、一聲いつしゆの者ものも、聞きて信しんじたばかりで、一聲稱いつしゆしやうへるひまなしに命終いのちをばりた、至極短命しごくたんめいの機きも洩もさぬこゝろを、顯あらはしたが乃至ないしの言ことで、此乃至十念このないしじふねんの意こころを、釋迦しやかは觀經くわんぎやうの下三品げさんはんに、下上品げじやうはんは一聲稱名いつしゆしやうみやうの人ひと、下々品げげはんは十聲じゆしゆ稱名しやうみやうの人ひと、下中品げちゆうはんは聞きたばかりで、一聲いつしゆも稱とへぬ人ひと、此三人このさんじんが皆往生みなわうじやうしたが乃至十念ないしじふねんのこゝろ、其中そのなかの下中品げちゆうはんの機きを、平生へいぜいの

相に説たが願成就の文、是が佛願であつて、此佛願に順ふは、
一聲の稱名をまたず、聞信の時往生定るが、佛願の力であるこ
知たなら、自分の口に稱へるをたのみにせず、信ずる時往生定
る。是佛願の意であるこ知て、それに順ふが、順彼佛願故の善
導の釋意である。それなればこそ、此正定業の釋は、就行立信
の釋で、此乃至十念の行に就て、信を立よこ云ふ善導の意故、
就行立信云はれたので、此肝要な立信を忘れて、稱へるを手
柄のやふに心得、稱へるを功とする意のあるが、自力疑心の念
佛なり。

爰で疑心はいかなる者かを心得ねばならぬ、疑心に二種あ
り、一は本願疑惑の疑、二は煩惱の疑なり、此二つの中煩惱の

疑は不斷煩惱得涅槃故、命終るまでなくならぬ疑なり、此疑に
まぎれる疑のやふなものに不正見云ものがあるが、是も煩惱
故死ぬまでなくならぬ。

疑の定義は猶豫不決である、善見律には二心云てある、要
するに出たりひつこんだりするが疑である。唯識論などでは、
人の持て居る煩惱を二十六に分つ、其中貪、瞋、慢、無明、見
疑、を本惑と名け、其外の二十を隨惑と名けて、本惑は煩惱の
親分である、此本惑の中に疑煩惱が居る、此疑は過去未來こ、
一切諸法のはたらきこ、因果の道理こ、菩提滅道の四諦の理こ、
三寶を疑ふので、其疑ふこは、其理を其通りであらふこ思ひ、
又はそうでなからふかこ思ひ、進んでも見たり、又は退く氣に

もなるが疑なり。此疑は本願疑惑の疑ではない、他力安心に就て誠る疑は、進退不決は同じけれども、彌陀の本願に對するに限りての疑である。進む心にもなり、退く心にもなる、二た心とも云、それ故ふたころなく彌陀をたのむ云も、疑なく彌陀をたのむ云ふも、同一である。

疑に就て昔から、疑はれて云ふ人がある、學者もよく疑はれて云ふ言を使ふた、併是はよろしからぬ言と思ふ、なぜ宜しからぬ云か云ふに、疑はれて彌陀をたのむ云へば、たのむに心想が二つになる、疑ひはれて云ふ心想となりて、此心想を以て彌陀をたのむ云ふ、即ち二重の心想の相なる、之に加ふるに、はれる云ふは如何なる意義なるや、疑に關し

て論釋共に見當らざる語なり、御文は鄙俗の語を主として使用なされるも、疑なくこはあるも、はれるの語なし、祖師覺師存覺等も亦はれる云はれたるこなし、尊號銘文隆寛律師の語に、疑雲永晴の句あり、然れども晴は雲なる譬喩より生じた文字で、疑の字より來りしに非ず、相承になき語を用ゆるは何の必要の爲か、殊に晴は曇に對す、無智の凡夫うたがひはれて云ふ語を聞けば、疑は曇の如きもの、曇晴れて一碧空を見るが如くなるここ思ふべし、是れ人を惑すの甚きものなり。相承になき語一なり、疑に對して詮表するこなき語二なり、聞者をして情感を生ぜしむ三なり、是皆不可なり、三不可を犯して無稽の語を用ゆ、宜く改むるに吝ならざるを要すべし。語は人

の心を動かす、人の心を動かさざる語ならば風水の音と同じ、語は人の心を動かす爲の語なり、人の心を動かされば語の力用なきなり、疑に付てはれるの語を使へば、聞く人は之に動かされず、曇天が晴天になるが如きが、疑ひはれたのであると受領すべし、若もそんなやふに聴受して、晴天のやふな心になることと心得たならば、此人は終に獲信の期はなかるべし、疑に對する言は信なり、又二た心ある場合に對するは一心なり、狐疑とあるときは決定が對である。

疑なくたのむと云へば、疑なくは遮詮で、たのむは表詮なれば、一心相の二義である。猶無礙道と解脱道の如くである、疑なくたのむ、疑なく信するこそ、一心にして二た心なき相で、

いかにも信心無二一心故是曰一念是名一心の釋、又一心といふは教主世尊のみここに、ふたころなく疑なしとなり、これまことの信心なりの釋、道理極成して一言の間然する所がない。何の爲に疑晴れての語を用ふるか、かゝる無稽な語は使はぬやふにせねばならぬ。

本願を信するに就て、疑なくと云ふ疑は十九、二十の信を云ふのである。十九、二十の信を疑と名けたは釋迦如來で、大經に説せられてある。

於此諸智疑惑不信然猶信罪福修習善本願生其國と、此諸智とは佛智不思議智不可稱智大乘廣智無等無倫最上勝智の五智、即ち彌陀の智慧のことで、之を總じて佛智と云ひ、此佛智

より成就したまひた信行故、智慧の念佛こも、智慧の信心こも名けられる。之を衆生に廻向してたすけたまふが本願である、之を疑惑して信ぜずして罪福を信ずる。

此罪福を信ずる者のことを、本願疑惑の行者ご云ふ、故に罪福信の信が、本願に對する疑である。祖師は此疑惑の人の爲に、正像末讚の末に、佛智不思議の彌陀の御誓を疑ふつみを知らせんごあらはせるなりご仰られて、二十三首の疑惑和讃を御製作なされてあるのである。此和讃の中に、如來の諸智を疑惑して、信ぜずながらなをもまた、罪福ふかく信ぜしめ、善本修習すぐれたりご仰られて、佛智他力は信ぜずして罪福は信じて居る、それを誠めて第二十三首の最末に、佛智うたがふつみふかし、

此心たもひ知るならば、悔る心をむねごして、佛智の不思議をたのむべしご、改悔を御勸なされてあり。

罪福を信ずるご云は、己の罪のふかきことを信じて居るが、罪を信ずる故少善根では往生はならぬ、多福德多善根でなければならぬから、名號を稱へて、此稱名の多善根で往生しやふご信ずるのが、福を信じて居るので、それを罪福信ご云ふ。佛智の不思議は廻向法であるから、自分の聲に稱へあらはすをまたず、聞得るとき往生定る此ごを信ぜぬ、是は二十の願の機の信である、是が本願に對する疑なり。

十九願の信は、此二十の願の機を説せられてある前に、以疑惑心修諸功德願生其國

と説てあつて、諸の功德と云は定散二善で、即ち雜行雜修である。二十の機の處に、善本を修習するこある善本は、諸の功德とは違ふので、善の根本と云ふことで即ち名號の事なり。彌陀法では善の根本は、名號である故善本と謂ふ、化卷に善本者如來嘉名此嘉名者萬善圓備一切善法之本故曰善本也とあり、善法の本を善本と云ふ。例は法華文句四之二五、方便品の文を釋して、善本とは眞如實相也とあり、名號は彌陀法の實相眞如なり、故に眞如一實の功德寶海と云ふ。

二十の願の機は念佛一行になつて在るから、諸の功德を修すこと云ふことはない、唯罪福信から多福多善の念佛一行を修して、往生しやふこと云ふ信である。此十九、二十の機は共に、本願の廻向に依て往生することを知らぬ、惑疑の信であるから、是が彌陀をたのむに就ての疑である。

此疑の心相はいかなるものであるか、曰、此疑の相は即ち進退不決の二たごころである。二た心とは二つの心と云ふこと、往生できやふと思ふが一つの心、往生出来まいと云ふが一つの心、それが二た心である。是信心決定の前には必此門を通る、直入の機と云ふもあれども、三願轉入して十九の願の機になり、それから二十の願の機になり、二十の願の機から十八願に入ること云ふが、百人の九十九人までは是である、そこで此二た心の門は必通らねばならぬ。

何故に二た心の門を通るかこと云ふに、安心治定の場合には佛と

衆生と相對の時であるから、佛の方をながめるこゝ、衆生自身の方をながめるこの心は、生ぜねばならぬ筈である。此場合に法の方をながめれば、法は大丈夫であると思はれる、そこで法の方に眼がつくと、往生できると思はれる。又機の方に眼がつくと、如何にひいきめに詠めても、佛になられそうには思はれぬ。そこで機をながめるこゝ、往生はできぬかもしれぬの心が起る。是は佛法では心所有法の必然の結果、心理學などでは心理的作用の免るべからざる事である。其往生出来るこもなり、往生如何こもなりするのが二た心、それが進退不決と云ふもので、之を疑と云ふのである。

此機に就て疑ひ、法に就て疑ふは、自力心の免れがたいこゝ

であるが、覺師口傳鈔上に、善惡のふたつをば過去の因にまかせ、往生の大益をば如來の他力にまかせて、かつて機のよきあしきに眼をかけて往生の得否をさだむべからずこなりと云へり、生得の機の善惡は改るこ能はず、改めたりして佛になる因にはなるべくもなし、故に過去の因にまかすべし、横截五惡趣、趣自然閉の故なり、是は機の方の心配いらぬこを説せられた佛語なり。法の方を云へば、凡夫が一生に成佛するなごは、華嚴法華の法門にも、十方諸佛の誓願にも、全くなき所なり、凡夫の心のはからはるべき分限に非ず、故に決定必成の大願成就の、彌陀にまかせよと教へられたものなり。

此の如く、機の善惡は前因にまかせる、何故にまかせてよい

か、それは彌陀の願力は、三界を超絶したまふ破闇の徳あるが故なり、往生をまかせば満願の徳あるが故なり。然れども彌陀にまかせられぬは彌陀をたのむこゝろなり、此彌陀をたのむに就て疑が邪魔なり、機の善悪も、往生の大事もまかせるはよいが、疑は何とするか、是破闇満願の心得かたが、まだ手延になつてあるからである。蓮師はさしよせて云へこ仰せられた、安心はさしよせて心得ねば、體認實踐の獲信の益を得られぬ。疑を破るは、殊に破闇の第一重要な徳である、光明名號共に破闇の徳あつて、殊に疑を除くは其決定の業用である。光明名號の決定の業用とは如何、曰、破滿の徳は決定の徳なり、たのむ衆生は必攝取せられる、たのむ衆生は必无上大徳の功德の主

こなる、此必ず云は、日は必夜こなる、人は必ず死するこ云ふこきの必ずの如く、動かすべからざる確然完全の結果を持つ居ることを顯す、此必は第十一願に、必至滅度と誓ひ、重誓に必至無上道と誓ふ。此無上道は光壽無量が、彌陀の覺體のみの光壽無量の如くなるに拘らず、其成就の文を見れば、衆生も亦光壽無量の益を得る、是超世願なる所以で、彌陀の願行は即ち衆生の願行なり、故に必至無上道の必は、彌陀の必即ち衆生の必なり、彌陀の願即ち衆生の願なり。而して此願既に成じたまひし相は今南無阿彌陀佛なり。此必は即ち決定を顯す、故に善導は名號を正定業と名く、正定業の釋は就行立信の正助二行の釋なり、故に助行を助業と名く、正行を正業と名けて足れり、

一の定の字を加へたは決定の義を顯す爲なり、就業立信は深信の釋なり、深信の一事に決定云ひ、其他三心釋の中決定の語を用ふるこ甚多し、此多くの決定は其本、名號が正定業即ち正しく決定せる業因なるより來る、即ち彌陀の決定は衆生の決定なり、是破闇の根本理由なり、亦滿願の根本理由なり。

決定の境は疑を破る、何故なれば、疑は決定の反對なり、故に疑を破る決定の境獨能く之を破る、人が必死するも、決定の境なり、晝が必夜になるも決定の境なり。境は心がある物にむすびついた處を云ふ、心が花を思ふ是れ心が花にむすびついたものなり、酒を思ふ茶を思ふ死を思ふ生を思ふ佛を思ふ地獄を思ふ、皆之を境云ふ。それに決定の境、不決定の境あり。

り。今日は雨が降るかふらぬか、又此商ひは利益があらふかあるまいかなごは、雨又は商業が境であるが、不決定の境なり。

此食事をすれば腹がふくれる、此火を握めばやけどをするなどは、食事に對し火に對した境であるが、是は決定境である。

決定は不決の反對なるが故に、對治法の原則として、猶豫不決を性とする疑は、決定の境の爲に破られる。決定境に對すれば疑はなくなる、只決定の境であるか、ないかを知るが必要なり。

名號は決定業なり、決定業の名號を聞くは決定の境なり。故に往生如何の二の足をふむに及ばず、又機をながめても亦決定の境なり。此決定は無有出離之縁の決定境なり、無有出離之縁

の決定の境なる故、此機では往生如何の二の足をふむのでなく、この機をたすけたまふ決定の願力ぞ知る、是が疑がなくなたのである。機は決定して無有出離之縁、それを決定して往生せしめる、是即ち正定業と名けられた名號の、決定業である所以と知る。

一心にこそは、

天親菩薩の一心と同じ一心で、即ち信卷本の合三爲一の一心なり。願成就文には一念と説てある、是を祖師は信卷末に、一念と言ふは信心二心なきが故に一念と曰ふ、是を一心と名く、一心は即ち清淨報土の眞因なりと釋なされてある。此一心は、我心を一筋にかためるのでない、信心二心なきが故にこの教であ

れば、名號のいはれに二た心がないのである。二た心とは上に云ふ如く、たすからふかたすかるまいかの二た心のこゝ、祖師は天親菩薩の一心を尊號銘文に釋なされて、一心といふは教主世尊のみここに、ふたこゝろなく疑なしとなり、是即ちまことの信心なりと仰られてある。教主世尊のみこゝは、願成就文即ち釋迦の教のこゝなり。

阿彌陀如來こそは、

無論光壽無量の覺體なれども、たのむ所は名號である。それは何故であるか、既に阿彌陀如來と光壽無量の覺體を擧てあるは、たのむめあてゝあるは明白である。然るにたのむ所は、名號であるとはわからぬでないか、非難せられるであらふが、其

非難は誤である。此非難者はやゝもすれば二帖九の、一心一向
ごいふは、阿彌陀佛にをいて二佛をならべざるこゝろなり、こ
の故に人間に於ても、まづ主をばひこりならではたのまぬ道理な
りごあるを、佛體をたのむ例證ごすれごも、是は却て佛體をた
のむを破斥する、例證ごなる文なり。

彌陀は報身佛なり、報心佛は一切諸佛皆光壽無量なり、光壽
無量は報身の諸佛常同の覺體なり、もし光壽無量の覺體をたの
みて、往生成佛を得べきならば、何佛をたのみても往生成佛す
ることを得べし、然るに凡夫一生の往生成佛は、必彌陀に限る
は何故なりや、光壽無量の外に彌陀に限る理由があるからであ
る。

此理由は善導が明に釋してある、往生禮讚に諸佛の所證は平
等にして是一なれごも、若願行を以て來收るに因縁なきに非ず、
然るに彌陀世尊もご深重の誓願を發して、光明名號を以十方を
攝化したまふ。但信心求念せしむご、平等是一は光壽無量の覺
體なり、願行來收は佛々常別なり、依て其別なる所以、即衆生
攝化の別なることを、以光明名號攝化十方但使信心求念ご釋な
されたり。

覺體は諸佛皆光壽無量なれごも、衆生攝化は佛々同じからず、
それは因位の願行に依る、彌陀に限りて五乘齋入せしめ、凡夫
一生に成佛せしめたまふは、以光明名號攝化十方、但使信心求
念が諸佛にないごこで、彌陀に限る所の衆生救濟の無量力威徳

である。我等凡夫のたのむ所は、此彌陀に限る力をたのむのである。

此特別な救済の理由の、最明白なは阿彌陀佛即是其行の釋なり、何人が見るも阿彌陀佛とあれば、淨土の佛なることは云ふまでもなきことなるに、それを善導は行と云はれたり。攝論家が唯願無行と云ふたも、阿彌陀佛を佛體と見た故で、南無を救我が義とし、阿彌陀佛を佛體と見れば、南無阿彌陀佛と稱へるは、たすけてくだされ阿彌陀さまと云ふことなれば、たすけてくださるの南無は願なる故、願はあれども行はない、それ故唯願無行と云ふたのである、其佛體と見た阿彌陀佛の四字を、善導は即是其行と釋せられた、攝論家は學者である、學者の眼に

佛體とより外見へぬ阿彌陀佛を、即是其行とはごんだ事を言はれたもので、此意想外、破天荒の釋は何から出て来たか、何故に行であるかを解すが、安心に就て最要最重の事である。

阿彌陀佛なる佛體が何故に行であるか、曰、發願廻向が彌陀の衆生廻向なるが故である、廻向には挾善が條件であるから、廻向の物がらがなければならぬ、其物がらが阿彌陀佛で、永劫の行を阿彌陀佛の名號として、衆生へ廻向なされたから、即是其行と釋したのである。

之を元祖は和燈六十二に、我須く衆生の爲に永劫の修行をわくり、僧祇の苦行を廻らして、万行万善の果徳圓滿し、自覺々他の覺行窮満して、其成就せん所の、万徳無漏の一切の功德を以

て、我名號わがみごうとして衆生しゆじやうに稱とへしめんご云へり、萬德無漏まんとくむろうの一切いっさいの功德くどくは、即ち彌陀覺體みだかくたいの全德ぜんとくなり、之を名號みごう即ち阿彌陀佛あみだぶつ即是其行そくぜとして、之を發願はつがん廻向くわうする、是の如くなるが故に、彌陀みだの因行衆生いんぎやうしゆじやうの因行いんぎやうとなつて、衆生しゆじやう即ち一生いっしやうに往生成佛わうじやうぶつす、是即ち諸佛しよぶつになき所の彌陀みだの無量力威德むりやうりきみとくで、衆生しゆじやうのたのむ所は茲こゝに在るのである。

此特別このとくべつの救濟きうさいある故に、諸佛しよぶつをたのますして彌陀みだをたのむ、諸佛しよぶつも亦我またわれをたのめご云はずして、彌陀みだをたのめご證誠護念しやうじやうごなされる、それは彌陀みだが特別とくべつの願行がんぎやうを成就じやうじゆして、廻向くわうを以て衆生しゆじやうをたすけたまふ故である。其特別このとくべつの願行がんぎやうが、即ち南無なむは願がんなり、阿彌陀佛あみだぶつは行ぎやうなりの名號みごうである。故に元祖げんその大經釋だいぎやうしやくには一いっに總

じていづれの佛ぶつも、成佛じやうぶつ已後は内證外用ないしやうげいようの功德くどく、濟度利生さいどりしやうの誓願せいがん、いづれもく深くして勝劣しやうれつあることなけれども、菩薩ぼさつの道みちを行ぎやうしたまひし時の、善巧方便ぜんぎやうほうべんの誓皆是區ちかひみなこゝなることなり、彌陀みだ如來にょらいは因位いんみの時とき、専ら我名號わがみごうを念ねんぜん者ものを迎むかへんと誓ちかひたまひて、兆載永劫てうさいようきやうの修行しゆぎやうを衆生しゆじやうに廻向くわうしたまふ、濁世じやくせの我われらが依怙いこ、未代まいだいの衆生しゆじやうの出離しゆり、是に非あずは何なにをか期ごせんや、是に依よて彼佛かのぶつも我建起世願わがこんてうせがんさなのりたまへり、三世さんぜの諸佛しよぶつも、未だ是の如ごときの願がんをば發おこしたまはず、十方じつぱうの薩埵さつたも、いまだ此等こゝらの願がんはましまさずご云へり、我建超世願わがこんてうせけんの願がんを、三世十方さんぜじつぱうに類たぐひなしご贊さんし、其三世十方そのさんぜじつぱうに超こたる所以ゆゑんを兆載永劫てうさいようきやうの修行しゆぎやうを廻向くわうしたまふに歸きす、是を前まへに引ひく万德無漏まんとくむろうの一切いっさいの功德くどくを以て、我名號わがみごうとして

の文に對照すれば、光壽無量の覺體一切の徳を、阿彌陀佛即是其行として衆生に廻向して、衆生をして一生成佛せしめたまふ、正に是三世十方に超絶した、彌陀特殊の大願業力、是が凡愚底下のたのむべき所なり、是をたのむを彌陀をたのむと云ふ。

難者が主をたのむと云ふ御文を證して、佛體をたのむ義を成立せんとするも、主をたのむと云ふは、主の肉體をたのむのであるか、又は主の仁智の徳か、財産が多いか、肉體以外にあるたのみになる理由あるをたのむか、論ずるまでもなく肉體をたのむのではない、若肉體ならば、徳も財産も有無を論ずるに及ばぬ、それなれば何人を主とたのむも同様で、主を選ぶなごは全く無用の事に屬する、然れば主をたのむと云ふも、たのむ

所は肉體に在るのではなくて、其人の何等かの徳をたのむのであつて、彌陀をたのむと云ふが佛體をたのむのではなく、廻向の名號をたのむと同一であれば、却つて難者自ら立義者を助成する事となる。

此理由なるを以て、阿彌陀如來をたのむと云ふは、廻向の名號をたのむを云ふのである。故に本願をたのむとも、斯行信に歸命すとも、佛智の不思議をたのむとも、他力の至心信樂をたのむとも仰られる。

我々が今度の一大事の後生とは、我らの語を自分の一人稱とするこは、久く世間に普通の語となつて居る、支那にも吾儕吾曹吾人の類、皆多人稱の語なれ

ごも、一人稱として使用せられてある。或は之を善導の我等愚癡身より來るご云ひ、或は還相廻向の義を含むなごの説もあれごも、穿ちすぎた説なり、我等愚癡身は道俗時衆等の同行者ご共に歸敬する、偈頌中の語なれば、一人稱の例にはならぬ、是等は世俗の通用語として、妥當であらふ。

一大事の後生ごは、御文一帖十一、今度の一大事の往生、又二帖七、今度の一大事の報土の往生、同帖十、今度の一大事の往生極樂ご、是等の例によれば今度の一大事ご云ふは往生を指す者なり、是を法華經の一大事因縁ご合して、一大事は成佛を指すご云ふ説もあるが、法華を引來らずごも、彌陀の法門の中に在て一大事ご云は、往生成佛なるは無論なり。

後生を極樂、後生地獄なご争議する人もあれごも、單に後生ご云ふのでなく、御たすけの言ありて、たすけご云ふごは彌陀の救濟の事、彌陀の救濟は成佛を云ふのであれば、後生ごは往生の生で、即成佛を云ふのである。猶下の御たすけ候へごの下に説明すべし。

御たすけ候へごたのみ申て候ごは、御たすけごは何を言ふか、是は願成就文の即得往生住不退轉で更に委く云へば、正定聚ご滅度ごの二益を兼て顯す言なり。言南無者では必得往生のこゝろなり、祖語では歎異鈔に、誓願不思議にたすけられまいらせてごあるご、同義なるご前に述べた如く、誓願不思議のたすけの相が、即ち即得往生住不退轉

なり。是を御文には一帖四、現當二益を以て教られた、御一代聞書第十八條にも、正定聚と滅度をわたりたすけとして示させられてある、是がわたりたすけと云ふ言の定義なり。

或は墮る後生のたすかることといふ説もあるやに聞けども、それは本願の約束でない、苦樂昇沈は得益の両面なれば、出三界を甚言して墮る後生のたすかることと云ふのかも知れぬが、彌陀の願意は、積極であつて消極でない、必至滅度が本願の主意である。教行信證の四法では、證卷がわたりたすけなり。

御文にては五帖四、この佛をふかくたのみて、一念御たすけ候へし申ん衆生を、我たすけずば正覺ならじと誓ましますと云ひ、五帖八、諸の雜行をすて、一心一向に彌陀をたのまん衆

生を、たすけずんば、われ正覺ならじと誓たまひてごあるは、彌陀の目的は衆生をたすけるにあればこそ、誓ひたまひたのである、此たすけるは若生者を云ふのであるが、四帖八には、阿彌陀佛のむかし法藏比丘たりしとき、衆生佛にならずばわれも正覺ならじと、誓ましますとあれば、誓ごあるは即ち衆生を佛にするこゝで、それを五帖四五帖八ではたすけるご仰られたものなり。

又之を本願の上で見れば、三信十念は願事にして、それに對して若生者の誓がある、此若生者を往生即成佛の誓ご見て、御文には衆生佛にならずはと云ひ、又は衆生をたすけずはと、和らげて仰られたものなれば、たすけるは誓である、誓は若生

生者である、而して往生即成佛であつて、それが成就せぬなら
 我も正覺ならじと誓たまひたは、即ち彌陀の目的は衆生を佛に
 するに在るので、之をやはらげてたすけ云はれたものなり。
 たのむ云ふは祖釋の如く、よりかゝりよりたのむことなり、
 今度の一大事の後生に就ては妻子も財寶もたのみになるものは
 一つもなく、孤獨犖々として力さすべきものは半點もなし、然
 るを彌陀廻向の名號のみは報土往生の眞因として、聞得る一念
 の信心として、大願業力の増上縁として、報土得證の益を得せ
 しめたまふ。此大願業力によりかゝりよりたのむが、蓮師のた
 のむと仰られたことろなり。

是で御たすけたのむこの言の意はわかるが、是だけてはた

すけ云ふ言きたのむ云ふ言がわかつたゞけで、たすけた
 まへきたのむ云ふ一句としての意はまだわからぬ、依て以下
 は、たすけたまへきたのむ云ふ一句としての意を解くべし。

御たすけ候へきたのみ申て候は、即ち御文のたすけたまへ
 きたのむとあること同一なり。此一句は古來種々の異解を生じ、
 異安心云はれるは、多く此一句がわからぬから生ずる故に、
 此一句は明に領解せねばならぬ。

たすけたまへきたのむとは、たすけたまへの語、たのむの
 語。二語を合せて一句としたもの故二つのことろがある。二
 つの意は、目的と手段とである、たすけたまへは目的で、た
 のむは手段である。説教なごに何人もよく云ふ所の、三僧祇百

大劫の修行を、信の一念に飛超て佛になるが横超の本願である
と説く、是が即ち目的と手段を云ふので、聖道門なれば三僧祇
の修行は手段で、成佛は目的である、成佛したいと云ふ希望即
ち目的を満足し成功するに就ては、三祇の修行が入用である、
三祇の修行を成就せねば佛になる目的は達せられぬ、此目的を
達するが爲の手段が三僧祇の修行である。

我等底下の凡夫は此修行はつごめられぬ、修行の手段をせず
に、目的の佛にならふと云ふても、それは目的ばかりで手段が
ないのであるから、目的の達せられる道理がない。現に何人も
日日の百事いかなる瑣細な小事でも、手段なしに目的が達せら
れると云ふことはない。右に在る煙草入を左にやるにも、下に

在る茶碗を上へあげるでも、手段なしに目的は達せられぬ。小
事さへ手段なくては目的は達せられぬ、況や博士にならふと云
ふ目的を達せんとするなら、學問をするに云ふ手段をせねば博
士の目的は得られぬ、大事も小事も一切目的を達するには手段
がなければならぬ。

然るに彌陀の本願は、目的も手段も共に彌陀が成就して、そ
れを衆生に廻向したまふ故、衆生の方は此廻向を受取るのみで
手段目的二つながら満足する。其目的の満足がたすけたまへて、
たのむは手段の満足である。御文五帖二十、他力の信心といふ
は何の要ぞといへば、かゝるあさましきわれらごときの凡夫の
身が、たやすく浄土へまいるべき用意なりと云ひ。二帖二、そ

の信心しんじんといふはなにの用ようぞといふに、無善造悪むぜんぞうあくのわれらがやうなるあさましき凡夫ぼんぷが、たやすく彌陀みだの淨土じやうどへまいりなんずるための出立でたちなりと云ふ。なにの要ようと云ふも、用意よういと云ふも手段しゆだんのここで、蓮師れんしの頃ころに言いひ慣なはせた言ことばに、路費ろひのここを要脚ようきゃくと云へり。要ようは必要ひつよう要須ようしゆなご云ふので、是非ぜひ入用いりようなるを云ふ。用意よういは準備じゆんびなれば手段しゆだんなること無論むろんなり、而しかうして此手段このしゆだんは彌陀みだの満足願まんぞくがんの廻向えきかうなる手段しゆだんなれば、出立でたちと云ふも用意よういと云ふも一念いんねんに在あること故ゆへ、之これを横超わうちゆうと名ける。

さて手段しゆだんは目的もくてきから生しやうずる、目的もくてきのない手しゆ的だんはない、目的もくてきのない手段しゆだんは狂人きやうじんか喪心人さうしんじんでなければせぬことなり。流汗淋漓りうあせんりんりであへぎく走はしる者ものあらんに、たまいはごこへゆくのかと尋ねら

れて、いやごこへもゆかぬと答こたへたなら奇妙きせうでないか、これは手段しゆだんがあつて目的もくてきがないのである。又人またひとあり、曰いはく、今日千圓けふせんえんまふかるご、それは結構けつこうである、何か賣うるのか、いや何も賣うる物ものはない、それなら株かぶか米こめでも買かふのか、いやそれは金かねがないから買かへぬ、それではどうしてまふけるのか、さればまふかるつもりやと云はゞ、狂人きやうじんより外ほかそんなことを思おもふ者ものはない。是これは手段しゆだんなくして目的もくてきばかりあるのである、手段しゆだんのない目的もくてきは空虚くうきよである、目的もくてきのない手段しゆだんは徒勞とらうである、手段しゆだんと目的もくてきと二つながら在あつて、而しかも目的もくてきと手段しゆだんと相應さうおうした事ことでなくては、何事なにことも行おこなはれる事ことでない。

彌陀みだも亦手段またしゆだんと目的もくてきがある、衆生しゆじやうをたすける即すなはち成佛じやうぶつせし

めるは目的である、此目的を達する爲の手段は、衆生の大信大行を成就して、之を一名號に攝め、善知識の言ばより衆生が聞て受持すること共に、彌陀廻向の信行即ち衆生の信行となり、即生不退の益を成ずる、是其手段である。

之を開けば五劫の大願永劫の修行、之を合すれば南無は願なり阿彌陀佛は行なり、此願行を廻向せられるから、聞持のたごころに彌陀の願行直に衆生の願行となる、故に彌陀の目的は衆生をたすくるに在り、其手段は南無阿彌陀佛の廻向なり。衆生の目的、衆生の手段は、彌陀の目的彌陀の手段を廻向に依て我物とする、故に彌陀のたすけるご云ふ目的に同心したのがたすけたまへなり。彌陀の御たすけに同心したのであるから、

決定心なり。之を祖は、誓願の不思議にたすけられまいらせて往生をばごくるなりご信じて、ご仰られたり、御文五帖四、一心一向に阿彌陀如來たすけたまへご、ふかく心に疑なく信じてご云ひ、三帖二、やうもなく彌陀を一心一向にたのみたてまつりて、後生たすけたまへごふたごよろなく信じまいらする心を即ち南無ごはまうすなりご云ひ、一帖三、たすけまじませごたもふ心の一念の信まごこなれば、必如來の御たすけにあづかるものなりご云はれた如きは、祖語の意を承られたもので、たすけたまへが決定心であるを證明すべき言ばである。

問曰、たすけたまへは信であるか願であるか、或は云ふ、たのむは信なり、たすけたまへは願なりご、又或は云ふ、御文に

歸命といふはたすけたまへごまうすこゝろなりとあれば、たすけたまへは歸命なり、歸命なれば信なるべし、又、たすけたまへを欲生願生に配當するは、願生づのりの異安心なりとも聞く、是等の差別正邪を明に答られたし。

答曰、たすけたまへに就ての紛議は、願生づのりの異安心が根本で願生づのりの根本は、功存の願生歸命辯である。依て先づ願生歸命辯がいかなるものなるかを批評し、之が邪正を確定して然る後、其たすけたまへの意義のいかなるかを辯明すべし。今より百數十年前以前、西派今の本願寺派に功存なる者あり、本願寺通紀によれば明和六年越前大田の平乗寺功存講主となるごあり。東派今の大の講師に同じ、此人相當に讀書力もあつたやうに見へ

るが、何ごしたごか願生歸命を主張した、當時の能化講師の主張なれば、其行はれるも速で、且つ廣く未徒に信ぜられた。此人の著に願生歸命辯一冊あり、寶曆十二年二月頃越前福井で著したものゝ如し。願生歸命辯と云ふも實は三業歸命なり、此人は無事に入寂したが、繼で能化になつた京都淨教寺の智洞は、三業歸命を主張して、有名な三業騒動となり、終に正義者、大瀛、道隱二師と、幕府の糺訊を受けるに至り、智洞は獄死するに至れり。此騒動以來願生歸命を恐るゝご甚しく、願生の二字すら忌憚するが如き傾向を生じ、願生欲生と云へば、早計にも、異安心らしく思ふものあるに至りては失笑の至りて、熱い蕎麥で舌をやいたに懲て、冷し素麵をふきさまそふごするやうなも

のである。願生は淨土門の全體である、願生なければ淨土門はなくなる、一知半解の學者、願生のいかなるかを知らず、盲人象を論ずるが如き奇説を生じ、淨土を願ふ人をして、五里霧中に入るに至らしむ。

今此願生歸命辯の異安心なることが何人にもわかる所の二三説を擧て、願生歸命の發源地を明にすべし。

願生歸命辯に云、今吾宗に傳る彌陀をたのむといふことは、本願の三信を統括して近く六字の名號なることを示し、三信即一の欲生の一心開發をあらはしたまふすがたと見へたり。

評云、合三爲一のときは信樂とするが祖釋の規格なり。故に

畧本には、信樂是名信心と釋し、又一心是信心なりと云ひ、未だ欲生を信心と名けず、一心を欲生と云はず、廣本には信樂即是一心也、一心即是眞實信心なりと云ひ、信樂有一念と云ひ、横超者斯乃願力廻向之信樂と云ふ、此他證文甚多し、三信即一の欲生の一心といふは、全く祖釋及び覺、蓮二師にもなきことなり。是願生歸命を成立せんが爲に、かゝる謬妄な説を立たたものなり。

願生歸命辯云、蓮師の相の顯著なるをこりて、愚鈍下機にちかく示したまふゆへに、欲生歸命の一心にたのみいれて教へたまへり。

評に云、蓮師は何の處に欲生歸命の一心を教られたるここあ

りや、蓮師はいつも眞實信心と云へり、眞實信心は禮讚の深信にて、即ち大經の信樂なるは、宗學に心ある人知らざる者なし。二帖二には、彌陀を一心一向に信樂して二たごころなき人を、彌彌は必遍照の光明をもてその人を攝取してすてたまはざるものなりと云ひ、同三には、專修專念一向一心に彌陀に歸命するをもて、本願を信樂する體とす云ふ、一心一向に欲生してと云はず、本願を欲生すると云はず、然るを欲生歸命の一心と云ふ如きは誣妄の甚しきなり。

願生歸命辯云、願生のこゝろたれば佛に向ふなり、想に動けば名言を具するなり、然ごも三業の歸命をすゝめたまへるをきゝつゝ、私情を執じて歸命の相を廢棄するならば、違教の失は免るべからず。論主の一心歸命盡十方無導光如来願生安樂國とのたまへるにまかすべし、一心即三念門なれば行なり、三念門即ち一心なれば信なり、信行融即到して即ち他力なり。

評に云、論主の己心を申るゝ、偈の義を釋するとの差別なく、一心即ち三念門とは驚くべき妄言なり。信行融即到云ふに至りては全く眞宗の法相を知らず、信と行とは相の上の名なり、故に體一と云ひ、不離と云ふ、融即到云ふに至りて宗義未だ聞ざる所なり、要するに三業歸命の安心を成立せんとして、五念門中の三念門を附會し、又其五念門の行と云ふに躲避して、信行融即到云へる逃道を作りたるものなるべし。

願生歸命辯云、願生歸命を佛に向てのべあらはす初發の一念は、たのみにするに云ふのみに非ず、これ願求してたすけたまへたのみたてまつることなり、上に具に述るが如し。然したのみにしてたのむに云ふか、又たのみてたのみにするに云ふことは通ずべし、歸命するを直にたのみにするにばかり云て、御たすけ候へたのむことを廢するは決して非なり。

評に云、此一節支離滅裂、初發の一念に云ふは、初念と後念の別あるを自白す、たのみたのむに別を立るは意業を安心にするを自白するなり。歸命をたのみにするにばかり等云ふは、遺憾なく願生歸命の性體をあらはしたるものなり。

願生歸命辯云、論偈初行の三念門のすがた、他力安心の標相なり。發起さきいたりたすけたまふ佛願を聞得て、如來に向ひ合掌禮敬して、一心に阿彌陀如來たすけたまへたのみたてまつり、御助一定往生治定と信したてまつるなり。又云、善知識の教にまかせ、身業佛に向ひ合掌敬禮して、口業に阿彌陀如來わが一大事の後生たすけたまへと白し、心に念ずること口業の如く、かゝる出離の縁なき者をたすけたまへと、一心に歸命するに云ふべし。御助一定と信じて疑なきをこそ、今の歸命のすがたは云ふべし。

評に云、是三業歸命なり、論の何の處にかゝる釋ありや、又口業に阿彌陀如來わが一大事の後生たすけたまへと白す云

ふは、論の口業には似たこともなし、論の口業は讚歎門の行也、かゝるここのあるべきに非ず、心に念ずるここの口業の如く等こ云ふは、全く意業の作想なり、殆ど兒戲こ云ふべし。以上擧る所にて大略は解し得べし、願生歸命こ云ふは、三信を合した欲生が一心歸命なりこして、たすけたまへと思ふ心を一心の安心こし、之を欲生歸命とも名けたものなり。而して更に一轉して、三業歸命を主張するに至りては言語道斷で、祖釋も相承も影だにも見へぬやうになつた。

案ずるに其根ざす所は、意業を安心こしたが誤の初りて、終に三業歸命こまで手造りの甚きに至つた、意業こ安心こを間違へるは古人にも今人にも多くあるここので、出羽の公嚴の如きす

ら間違へて、香月院に、安心が意業である筈がないこ叱られた、意業が安心でないここのは相承の釋孰れも明であるが、殊に善導は、所所に釋せられて、其まぎれなきものは定善義の三緣釋禮讚の安心起行作業の釋等なり。三緣釋は親縁を釋して、衆生起行口常稱佛佛即聞之身常禮敬佛佛即見之心常念佛佛即知之衆生憶念佛佛亦憶念衆生こ、心に常に佛を念ずればこ云ふは意業なり、衆生佛を憶念すればこ云ふは安心なり。禪讚は安心起行作業を釋して、安心を三心こし、起行を五念門こし、作業を四修こす、其中意業を觀察門こ爲す、隨て作願門も意業なり、即ち意業を以て起行こす、淨土論論註も亦同じ。

元來業こ云ふは業行の義で、功業大業事業基業なご熟して

訓ずれば、「わざ」と云ふべき文字で、決して安心ではない。龍樹の中論觀業品の偈に、佛説きたまふ所の思は所謂意業是也、思より生ずる所の者は即ち是身口業なり、長行に云、思は是心數法なり、諸の心數法の中に、能く發起して所作あるが故に業と名くと説く。所作あるが故に業と云ふ、所作あるが故に起行なり。

口業は口の「わざ」、身業は身の「わざ」、意業は意の「わざ」であつて、「わざ」は所作なり、「しわざ」がよい「しわざ」がわるいなご所作を云ふのである、意業は意がしわざをするので、意がしわざをするこは、靜止してあつた意が起動して、たもしろいごかたかしいごか、うまいごかの意を起すので、此意は念生念滅す

るもので、之を意念と云ふ。意念は起れば滅する、起りては滅し滅しては起る、それがごうして心不斷にて往生する、安心であらふ筈がない。

しかし隨分立派な學者が間違へるからよく注意せねばならぬ、某學者の禮讚の講演に、時に、其根本の安心も意業でないか、なるほど意業也、意業なれども身業意業と肩を並べてあらはるゝ意業でない、三業にたこす根本となる故に業とは云はぬ、安心と云ふなり、業とは所作へわたりた所でなければ業とは云はぬ、等流相續する所へつく名なり、安心が縁にふれ事にふれて三業にあらはるゝと云ふ講演なり。是は作願門に就ての説明であるが、安心をなる程意業なりと云ひ、又意業なれども身口

業ご肩を並べた意業でないご云ふが如き、此人にしてかゝるご
ごを云ふは驚入ることであるが、身口二業ご肩を並べぬ意業ご
云ふごは、何の經論何の宗にあるごごなりや、手作りに程
がある、又なるほご意業であるご云ふ安心があるであらふか、
既に天親曇鸞善導皆意業を起行ごして安心の外に置く、祖々盡
く之を相承す。何の據る所あつて安心を意業なりご肯定したか、
解すべからざる事である。

意業は中論の釋の如く思の心所である、中論に心數ごあるは
舊譯なり、新譯では心所ご云ふ。意業が思の心所で所作あるも
のごするは、唯識論百法論等皆同じ。思は所作あるが故に業ご
名く、所作あるが故に起滅すること麁なり、憶念は念は明記不

妄の念で、明に記持して忘失せぬのである、此念に憶を添て憶
念ご云ふは、憶の力能く念を助けて、明記して憶持せしむる故
憶念ご云ふ、憶持して明記不忘故、憶念の心つねにしてごも、
心不斷ごも云ふのである。是が如何ぞ意業ならん、意業は起滅
す、明記不忘は起滅なし。

問曰、改邪鈔本五、意業の憶念歸命の一念たこればごあり、
意業の憶念ごあれば意業即憶念で、意業即ち安心でないか、若
意業即ち安心に非ずご云は、覺師は異安心なるか。

答曰、此改邪鈔の文は、三業づのりが唯一の證文ごして引く
文であるが、此文は繪系圖の邪義を破すに就て、師教を口業に
配し、安心を意業に配し、信後の禮拜を身業に配し、三業に配

當して教授の受持者の間に、繪系圖の無用なることを示し、形像の本尊すら尊ばず、歸命盡十方無尋光如來の、論主の論文を眞宗の本尊とす、其外の人形等は停止せよと誠諭せらるゝ文也。三業に師弟授受を配屬すれば、安心は意業に屬す、しかし是だけては意業の憶念なる語はわからぬ、之を説明すること亦重要な事なる故、詳に之を答へ、意業と安心の關係を明にすべし。

意業の憶念と云ふ語は善導の禮讚に出づ、禮讚二、三者意業憶念觀察門所謂專意念觀彼佛及一切聖衆身相光明國土莊嚴等如觀經說唯除睡眠時恒憶念恒想恒觀此事等故名觀察門とあり、此意業憶念の語を承られたものなるべし。

此意業憶念を解すには、憶念を詳に知らねばならぬ。憶念に

色法を憶念すること、心法を憶念することの別あり、又、泛爾の憶念と、明記不忘の憶念との別がある。

色法を憶念することは、曾て見た花を憶念する、山水を憶念するなどの類なり、是は形狀を憶念するのであるから單純である。それでも泛爾の憶念と、明記不忘の憶念がある。心法を憶念するは、觀道の修習などは皆是である、然るに觀を修するは必師教に依る、師教は授るに意業の相狀に非れば憶念すること能はず。それは何故なれば、凡夫は意業の發動以後でなければ心相を知るここ能はず、意業は前に云ふが如く、思の心所であつて、思の心所の造作する意の發動から始めて、我心がいかなることをして居るか、わかる、「デカルト」が、我れ思ふ故に我在りこ

云ふた、有名な近世哲學の基礎をなした咄も、思の心所の外ならない、是以前は凡夫のわかることでない。

起信論に據れば、心の相を九等に分ける、第一業相、第二轉相、第三現相、是に皆相と云ふ字があるは、心の相と云ふことである。此第三相までは羅漢もわからぬ、第四智相、第五相續相、以上五相は凡夫はわからぬ、第六執取相、第七計名字相、此二相もごくごわからぬ、明にわかるは第八起業相、第九業繋苦相で、第八起業相の業が意業である。此意業の發動する即ち我々凡夫のわかるやふになる次第は左の如くである。

こゝに寒風が吹くとする、此場合寒風が身に觸れると知覺がある、之を觸の心所と云ふ。此觸の心所と共に、寒いぞと警告する作意の心所と云ふ者がたこる、それと同時に寒いことじやと心を受る、之を受の心所と名ける。心が寒いと受ると共に、想の心所が起りて寒いと云ふ名相を立る、こゝで始めて思の心所即ち意業が審慮する、風の入らぬやうに障子を止めやふか、衣服を今一枚重ねやうか、火鉢であたゝまらふかなどの慮をやる、それが火鉢とか衣服とかに決定するご、其決定したごを實行する、是實行する名を發動勝思と云ふ。是は發勝思と動勝思を合併した名で、發勝思は口音に發する、意業と云ふことで即ち言語のご、動勝思は身體に動作すること、身體の行作のご、即ち口業と身業である、それに思ご名けてあるは猶意業の領分なるを示すのである。此審慮思、決定思、發動勝思

の三が、思即ち意業の動作であつて、此意業の審慮からでない
 こと、明記することが出来ぬ。受や想の位では散漫であつて、泛
 爾の憶念の微弱なものによりほかならない、又觸、作意、受、
 想、思の五心所は、遍行であつて、何にでも此五は先鋒隊で、
 受や想で止めて、思の心所に一寸待てくれ出してくれるなご云て
 もいけぬので、必俱時に起るのであるから、一切の事、思の心
 所で審慮等をやるのである。但し前五識即ち眼耳鼻舌身の五識
 は現量智であつて、第六識即ち意業の分別智でないから、記憶
 にならぬ、耳で聞ても、眼で見ても、思の心所即ち意業の分別
 即ち審慮まで来ねば自分の記憶にならぬ、記憶も漠然とした記
 憶では泛爾の憶念で、明記不忘の憶念でない。

そこで念の心所が、明記不忘の本性を全くしてくれねばなら
 ぬ故、意業の分別が總攬して前後の次第、位の優劣、善惡の取
 捨等をこりそろへ、統一したものにしてくれねば、明記不忘の
 憶念にならぬ。然るに今説明したことは、花ごか風ごかの色法
 で言ふのであるが、安心は心法であるから、總攬し統一して明
 な上にも明でなくては、安心の憶念にはならぬ。唯識述記の念
 の心所を釋する下に、若總不聞心散漫緣 便無念起と云てある、
 心散漫して緣すれば念は起らぬ、緣するご云は意の所在の事物
 に、意がひつつくごごなり。

今の必要は、安心の憶念の必要の爲に、前陳の如く念の起る
 次第を説たが、是より正に當の問題なる安心の憶念に進み入る。

安心の憶念は如何して憶念し得るか、曰、こゝで意業の憶念といふことが説明せらるべく、又、わかるべき順序になつて来た故、是より意業の憶念を説明する。要するに今まで説明し来た、意業の咄はいらぬことであるが、世人意業を誤認し、憶念を誤認せる者多き爲に據なく説明し来たので、是からが正しく本問題に入るのである。

總じて佛教は聖道と淨土とを論ぜず、行者に心法を教ふるは、意業の相狀を以て教ふる、是は意業の相狀でなくては凡夫はわからぬからである。近く起信論なども眞如を説くに、離言説相、離名字相、離心縁相と云ふ、言説、名字、心縁は皆意業の相である、そこで不可説不可念故名爲眞如と云ふ、それなれば考やふ

もなく言ひやうもない、然るに得入を説て離於念名爲得入と説く、念も意業なり、離れんとするも意業なり、其他一切染法不相應と云ふも、離一切差別相と云ふも、皆意業の相なり。覺知前念起惡能止後念令其不起の如きは、意業の相狀なること明々である。是意業ならざれば凡夫の心に入ることが出来ぬ故に、離言離相の眞如を説くに、意業を以てせざることを得ず、是を以て言を以て言を遣ると云ふ言は意業の發勝思なること、前に言ふが如し。即ち意業を以て意業を遣ると云ふこと一なり、遣るとは消すことを言ふなり。三論の八不中道も、法華の一心三觀も、皆是である。凡夫は實に厄介である、意業は迷中の迷で、ますく迷に入る者、而して其迷を出る道を教ふるに、意業

でなくては心法は一切、凡夫の心に通用せぬそこで教ふことは
意業の相状を以て授けて、意業ならざる安心に得入せしめるが
佛一代の教法である。

彌陀法を説くも意業の相で説く、而も行者の意業の相で授け
る、行者の意業の相で授ける故、行者の方で別に意業を造り出
すに及ばず、信受したが正に授けられた如く、如説の安心とな
るのである。是故に祖師は、銘文本三、聞こいふは如来の誓の
御なを信ずと申すなり、唯信心意十、聞はきくこいふ信心をあ
らはすみのりなり、一多證文二、きくこいふは本願をきよて疑
ふこころなきを聞こいふなり、またきくこいふは信心をあらは
すみのりなり、同十二、其有得聞彼佛名號こいふは、本願の名號

を信ずべしと、釋尊さまたまへるみのりなりとあり、是等の文
皆、聞を直に信こなされてあり、聞が直に信なるは何故なれば、
行者の意業の相として、信心を教へられるが所聞の法なり。行
者の意業の相として、教へられる故凡夫がわかる、其わかつた
まゝが自分の意業の相であるから、わかつて疑なき一念に、教
られた相を統一して、我安心なること、寫眞をこるが如くで
ある故に、後生たすけたまへと改めて意業を起さずして、後生
たすけたまへに心になつて居る。彌陀をたのむと云ふも、たの
む一念に往生一定と云ふことも、改めて意業を起して思ふてか
かるを待たず、心が彌陀をたのんで居る、心が往生一定となつ
て居る、是が聞即信で、而も雜行雜修自力をすて、後生たす

けたまへて彌陀をたのみ、往生一定と決定した安心である。くりかへして云ふ行者の意業の相にして授けられる安心なる故、聞信の其まゝが、授けられた如くに受取られたのである、之を如説とも如實とも言ふ。

しかし猶また不審がある、なるほど諸の雜行をすてよと云ふも、後生たすけたまへて彌陀をたのむと云ふも、皆行者の意業の相なり、意業の相て教へねば凡夫の心に入らぬと云ふは左もあるべし、然らば意業の相て教へるのならば、受た安心も意業でないかと云ふ不審なり。

それは意業でないから憶念と云ふ、意業は前に云ふが如く、意が所作をするのである。審慮思も、決定思も、意が所作をし

て居るを云ふ。憶念は所作でない、念は明記不忘で心が持つて失せぬのになつて居るのである。念は唯識論では、於曾習境、明記不忘爲性、釋し。大乘義章には、受法不失名之爲念とある。曾習の境とは、名號のいはれ即ち信心を教へられた時、聞わけられた時を云ふ、明記とは聞たことが明に記録した如く心に在ることを云ふ、受法不失は明記不忘と同じ、憶は大乘義章に、憶者縁過去と釋す。過去とは我安心で云へば、聞わけられた時を指す、念が明記不忘であつて、それに憶の過去を縁する力が副ふてあるを憶念と云ふ。

善知識が教へ授けるに、意業の相のもろくの雜行雜修自力のこゝろをふりすてよ、一心に阿彌陀如來、われらが今度の一

大事の後生、御たすけ候へごたのみ申て候、たのむ一念のごき、往生一定御たすけ治定ご授ける。受る行者は、意業の相て授けられるからよくわかる、わかつたが大乗義章に云ふ法を受たので、受た法即ち南無阿彌陀佛のいはれ、即ち安心の相ごして授けられたので、受た行者の方は、聞たいはれのまゝを受たので、それを本願名號信受してご仰られた、此信受の一念に法のいはれが、總攬し統一して行者の安心ごなるから、御文にはかくの如く決定ご云ひ、此心のつゆちりほごも疑なければご云ひ、かくのごこく心得わけたるを信心をこるごは云ふなりごも仰られるのは、信受の一念にもろくのより御たすけ治定までが、印を紙に捺した如く、宿善開發の心の中に受ごられて行者の安心

ごなつた、それが憶念ご云ふものである。

それ故善知識の授けるのは行者の受取られるやうに、行者の意業の相にして授ける、受取る行者は、信受の一念に、明記不忘の憶念の信ごなる、之を意業の憶念ご云ふのである、意業の相のまゝが憶念ごなつた歸命の一念である、意業の相でない憶念は、凡夫の心法にはないのである。

更に之を再言すれば、善知識は行者の意業の相にして授けると云ふごこが、今一段分明ならぬかも知れぬ、何故に善知識は意業の相にして授けるか、曰、凡夫は意業以前の心相を知らぬ、喩へば星は晝は見へぬ、星がないのではない、夜になれば始て見へる、凡夫の知る所は意業以後より外知らぬ、例せば煩惱具

足の凡夫なれば、煩惱は持て居るに相違ない、然るに意業以前の心相では何處に在るかわからぬ、わかるは意業と俱なふた、貪瞋等となつて意業の上へ發動して來ればわかる、此の如く心相の實際は全くわからぬ、憶念となつて、明記不忘の心不斷の安心となつても、其明記不忘の憶念即ち安心は、何處にござうして居るのかわからぬ。

此意業以後でなければわからぬ凡夫には、意業の相よりほか知らぬ故、意業の相にして授るほか授けやうがない。そこで南無阿彌陀佛の名號のいはれとし、意業の相としてみろくの至乃御たすけ治定と授ける、行者は此授けられたいはれを、いはれの如く如説に心得わける、此心得わけるに云ふは勝解と云ふも

ので、勝解は信の中の二義なる、忍と樂欲の忍であつて、忍は因で樂欲は果で、因果同時であるから、勝解すれば即ち信になるのである。それ故勝解の者を獲信の人となされる、是を正信偈に佛言廣大勝解者、と釋せらる、勝解と共に明記不忘の憶念となる、五帖十一、南無阿彌陀佛の體を、かくの如く心得わけたるを信心をこるこはいふなりとある、心得わけたは勝解で、勝解すれば明記不忘の念は起る、故に憶念の信となる。

善知識が授けるには意業の相を以て授ける、此授ける時は説必次第である、説必次第とは、説き授けることには單純な一つのここでない、改悔文なれば諸一、雜行二、雜修三、自力四、のこゝろ五、ふりすてゝ六、一心に七、阿彌陀如來八、我等が九、今

度の十、一大事の十一、後生十二、御たすけ候へ十三、たのみ申
 て候十四、たのむ一念十五、の時十六、往生一定十七、御たすけ治
 定十八、ざつごころが十八ある。之を説き授るごころは次第を
 立て、一一に説かねばならぬ、之を説必次第ご云ふ。言も、
 意業も、次第をせねばならぬごころが二つになれば、もう一
 時に云ふごころも、思ふごころも出来ぬ、是は言ご意業ごは同じも
 のであつて、數あるごころは一つ一つしまふてゆかねばならぬ、
 丁度ステーションで切符を買ふ時のやうに、一番先きの者から
 次第に一人あて買ふやうなもので前言がすまねば後言は出
 せぬ、前念が滅せねば後念は生ぜぬ、雜行雜修自力のころを
 ふりすてご云ふごころを、意業で思はんごするご、まづ雜行ご

思ふ、此思ひがなくなるご雜修ご思ふごころが出来、雜修の思
 ひが滅せねば自力ご云ふ思ひは生ぜぬ、それを前滅後生ご名け
 る、次第に一つあてよりほか意業はおこらぬ、言も是ご同
 じく二つのごころを一時に言ふごころは出来ぬから次第して言はね
 ばならぬ。言ご意業ご同じいは、言は發勝思で、思は意業であ
 るから同じ筈である。

それ故善知識が行者に授けるごころは、言で授けるから説必次
 第である、此教を聞いて受取、行者の信受の方を法在一心ご云ふ、
 教授ける方は言である故説必次第なれごも、受取る方は決定信
 の一念である。法在一心ごは、法を受取るは一心に在りご云ふ
 ので、聞せるいはれの中に、何程の數はあらふごも、總攬統一

して受取るの故、受取るは唯一心である。

末代無智の御文で云へば、末代無智の至第十八の念佛往生の誓願のこゝろなりまでは説必次第で、意業の相にして善知識が教へる言である、かくのごとく決定しては、かくのごとくは教のごとくで、教の言のまゝなることを言ひ、決定しては即ち決定信で、法在一心の受取たことを仰られたものなり、此決定した一念の信、直に行者の安心となつたので、授ける教が行者の意業の相で授けるから、受取る者は意業の所作をはたらかせるに及ばず、信じた其まゝが行者の安心として受取られる、是を大經には信樂受持と説てある。

以上で願生歸命の異安心なること、及び意業は安心でないこ

ごも粗述了りた故是よりたすけたまへたのむの語を切直に説明すべし、上に既に言ふた如く、たすけたまへは目的でたのむは其手段である。例へば病をなをしてくれきたのむ、舟にのせてくれきたのむ、手紙を届けてくれきたのむの類、皆この字で中間に境をして、其この字の前の言は目的で、この字の後のたのむは、此目的を達する爲の手段である。

目的は願求樂欲である、たすけたまへは若不生者の佛願の救濟を願ふので、衆生の目的は只此に在る。然るに此救濟は彌陀の願成就せる相を釋迦の教より聞けば、即得往生住不退轉であつて、此即得往生住不退轉は、即ち彌陀の目的、即ち彌陀の願欲で、之を願文に欲生我國と願欲を顯し、若不生者と其願欲の

外目的なきことを示されたのであれば、彌陀の願欲目的は、衆生を往生即成佛せしめる外のことはない。

此願欲目的の成就した相を、俚語にやはらげれば佛にする、たすけること云ふことである。名號では阿彌陀佛の四字である、是は既に成佛したたすけるであるから、決定のたすけるもののである、此願欲目的の成就し、決定した名號を衆生に廻向するのであるから、彌陀の決定の願欲目的が、衆生の願欲目的なる、而も決定である。

決定とは、大乘義章に、即實不退名爲決定と釋せり。實に即するとは、彌陀の願行成就が實なり、即するとは、實の如くにして厘毫も變異なきこと、不退は堅固不壞のこと、是を決定

と云ふ。此決定のたすけるものが、衆生のたすけたまへことなつたのであるから、決定のたすけたまへなり。決定のたすけたまへとは、祖語では、誓願の不思議にたすけられまいらせて、往生をばさぐるなりと信じて、念佛まうさんと思ひたつ心のたさるべき、攝取不捨の利益にあづけしめたまふなりとある是也。蓮師の語にては、御一代聞書第八條、正定聚のかたは、御たすけありたることよろこぶこと、滅度のささりのかたは、御たすけあらふずることのありかたさよこまふすことよろなり、いづれも佛になることをよろこぶことある是也。たすけられまいらせて往生すること信じたが、決定のたすけたまへなり、御たすけありたることよろこぶが決定のたすけたまへなり。

誓願の不思議にたすけられまいらせて、往生をばこくるなりは目的なり、たすけたまへなり。信じては手段なり、即ちたすけらるゝに信じたが、即ちたすけたまへごたのむご一つなり。たすけるご云ふごは、上にも云ふたごであるが、現生には正定聚の位ご爲し、後生には滅度に至らしむるごを云ふので、即ち願成就の即得往生住不退轉のこごである。故に御一代聞書の上に引いた文の前に御たすけありたるこごのありがたさよご念佛申べく候や、又御たすけあらふするこごのありがたさよご念佛申すべく候やご、御尋したるに對しての教語で、即ち正定ご滅度の二益を御たすけご云ひ、佛になるを御たすけご云ふの解釋である。是既に言ふが如く、佛の願欲は衆生を成佛せし

めるに在るので、其佛願に順じた心故、御たすけご云は現當二益を言ふので、即ち佛になるを御たすけご云ふのであるは明白なり。

佛の願欲に同心したのがたすけたまへである、同心ごは我意を用ひずに、人の意を用るのである。善導の隱義の廻向發願心の釋は、發願廻向を機に約するご同義である、善導の釋云、決定して眞實心中に廻向せしめたまへる願を須めて得生の想を作せご、彌陀が決定して衆生をたすけ眞實心中に廻向たまふしたまへる願ご云願第十八願を指すを須めて是までは彌陀の願をもちゐるその相は往生せられるであらふかせられぬであらふかごはからふた不決定の願をすてゝもちゐる今は彌陀の願即ち決定して必たすけるごある彌陀の願をもちゐる同心すば得生の想得た想は滅度の方御一代記の如しを作せごあるは、即ち決定

信のこごなり。

同心するご云ふことは、御一代聞書第二百四十二條、思案の頂上ご申すべきは、彌陀如來の五劫思惟の本願に過ぎたるごはなし、此御思案の道理に同心せば佛になるべし、同心ごて別になし、機法一體の道理なりごある是也。本願は即願欲、たのむものをたすけるごいふほかなし、此願成就の相が機法一體の名號なり、機法一體なるが故に、同心すれば彌陀の願は衆生の願なり。故に決定の信が即たすけたまへご彌陀をたのむごよろなり。

問曰、たすけたまへご云ふは、たすけてくれご云ふ意味なれば、たすかるかごうかまだ決定せぬ言である、それが何故決定

信であるか。

答、是決定の願ご不決定の願ごの差別がわからぬ故、此疑問が起る。決定の願ごは、決定業に對した願は、まだ結果まで至らずごも、願心は決定である。例せば甲地より乙地へ往んご願ふに、汽車に乗込ば、汽車は決定業であるから、乗込だごきから乙地へ往きえられるごご決定信になつてある、しかしまだ乙地へ着せぬごは、決定信中に乙地へ往ふごいふ願心はある、此願心は決定の願心である。其他何によらず、決定業に對して起す希望、即ち願心は一切決定願である。火の熱あるは火の決定業なり、水の濕すは水の決定業なり、故に火に對して煖をこらんごするも、水に對して渴を醫せんごするも、煖をこるまで

渴を醫するまでは願心なり、而して決定願なり。是等の例を以て考へれば、希望が決定業に對すれば、必決定願であるは明白である。

彌陀の願は決定願である、名號は決定業である、それ故正定業と名けたものなり。此決定業に對する願であるから、たすけたまへは決定願である。決定願なるが故に、決定信である。

是を覺師は、歸命のこゝろは往生の爲なれば、また是發願なりと云はれた、ための言が、目的を顯す言で即ち願なり、彌陀をたのむ歸命が、往生せんとする目的の心故、此たのむ心のほかに願心を副へるのでない、たのむ心が願ふこゝろなり。祖師は銘文に、亦是發願廻向之義といふは、二尊のめしにしたがひ

て、安樂淨土に生れんと願ふこゝろなりと仰られた、二尊のめしにしたがふたが、彌陀をたのむ歸命りしたがふはたのむなり即歸也のこゝろ、それが淨土へ生れんと願ふこゝろなりといふ釋なり。又同く銘文の欲生の釋に、欲生我國といふは、他力の至信心樂をもて、安樂淨土に生れんと願ふこゝろなりとあるも同じ意義である。此二釋のめしにしたがひての、ての字、至信心樂をもての、もての語は、共に手段を顯す言で、例せば舟に乗て行く、車に乗て行くと云ふ如く、ての言は手段を顯す。舟にのるこいふ手段、車にのるこいふ手段を用ゐて、行くこいふ目的を達する。車にのり舟にのりは手段で、行くは目的である。手段をすれば、其外に別に目的に力を用ふるに及ばず、手段が即ち目的

へ運んでくれるからである。此道理なる故、たのむこゝろの手
段の外に、別に目的の願心を作爲するに及ばぬ、たのむこゝろ
は願の爲の因であるから、因果必然の道理として、たのむ心の
同時の果の願は、たのむ心と同時にあるのであるから、別に願
心を副るに及ばぬ。

それなればたすたまへは願である、それでは異安心と云はれ
る非難があるでないか、たすけたまへは願である、欲生願生じ
やこいふ者は、願生歸命じやこいふことを聞て居るがごうあら
ふかご、是義に懲りて蓋を吹くので、矮人觀場の類である。

是は第一、功存の願生歸命から大騒動となり、智洞は獄死し、
其他處刑された人も多かつたこいふ事情から、狂言の、腰祈り

の山伏、一般に祈り過して、曲り過ぎたので、願生歸命は元來
嫌ふべきものでない、天親菩薩は願生のための一心歸命である。
存覺は眞要鈔末三、現生に於て願生の信心をたこせば、即ち不
退にかなふこいふこと、其文甚明なりと云へり。是は覺師が願
願鈔に、たま／＼欲往生の深信發得するは、しかしながら法藏
因中の強願、正覺の彌陀の智力、内熏密益するにより、一
念歸命の往益を成ずとあると同語法であつて、彌陀法に在ては
願生ならざる歸命があるべき筈なし、然るを願生歸命を嫌ふに
至りたは、願生歸命辯をきらふので、願生歸命辯の願生歸命は、
全く三業歸命なるが故に嫌ふなり。第二に此腰祈の山伏的學者
は、讀書のみにして自身往生の安心は疎く、御文にたすけたま

への言多くして、願のやうに思はれる、是を願とすれば、蓮師が願生歸命のやうである、何にかして、たすけたまへを願でないここにする工夫はないか、角をためて牛を殺す的、大不法に陥るを知らず、寶探しのやうに探しあてたは、御文五帖十三、それ歸命といふは、すなはちたすけたまへごまうすころなり、の文で、たすけたまへは願でない歸命であるといふ珍奇なる義を立て、蓮師の忠臣顔をする者は是也である。

たすけたまへが願でないごとは、臆面もなくよく言ふたもので、是は日本語のわからぬ人の言ふことである、救我度我も亦願である、たすけたまへ不動明王といふが何故に願でないか、又彌陀は欲生我國と云ひ、釋迦は願生彼國といふ、二尊未だ曾

て欲願は禁止すと云はれたことなし。龍樹、天親、曇鸞等、願生を勧められたれども、不可なりとせられたことなし。元祖が偏依善導と云はれた善導は願往生心を以て信心とせらる。祖師の往生を願ふの語は、頻々として何人も之を知る。

若し願なき歸命を主張するならば、是的なくして弓射るなり、目的なき手段をするなり、喪心病狂の人と謂ふべし、御文五帖十三の、歸命といふはすなはちたすけたまへごまうすころなりとは、歸命を願を以て釋したるものなり。三帖六に、また南無は願なり、阿彌陀佛は行なりとある如きは、願なりとあれば異議するの餘地なし。南無は願なりであれば、歸命を願で釋せられるも、何等の異論あるべきに非ず。更に之を詳説すれば、南

無歸命を願て釋なされるときは、願行具足の義を示さるゝのである。其例は近く執持鈔で、發願廻向を成上起下して、發願を機に約し、歸命に屬して、歸命のこゝろは往生のためなればまたこれ發願なり等と、願行具足の義を明す。五帖十三も、願行具足を顯す釋なり。

又、願行具足を顯すに非ずして、目的に手段を攝めた釋あり。二河白道の、衆生貪瞋煩惱中能生清淨願往生心是なり。祖師は愚禿鈔に、言能生清淨願往生心者發起無上信心金剛真心也斯如來廻向之信樂也と釋なされてある。是善導の私に非ず、龍樹は若人願作佛心念阿彌陀云はれた、願作佛心は願心なり。曇鸞此願作佛心を無上菩提心として、淨土往生の安心とせらる、

是も目的に手段を收めたるものなり。而して此例は其本釋迦に出づ、大經には聞名欲往生と説き、小經には已發願今發願當發願欲生阿彌陀佛國者是諸人等皆得不退轉と説く、聞名欲往生は、聞名に三信を收むこの説あるもそれは然るべし、其信受の相を欲生のみを以て説れたは、手段を目的に攝した説なるは異議すべきに非ず、小經に至ては明々白々、此目的なる發願の願、欲往生の欲は、彌陀の願欲を須ゐた決定信であるから、たのむ歸命の信心の願欲である。隨て御文のたすけたまへは、たのむ心に非るたすけたまへでない。

たすけたまへは願なり目的なり、たのむは信なり手段なり、願は樂欲なり、信は無疑なり、是は祖釋の規格、是を一つにし

一五〇
たが信樂なり、信樂は三を合した一心の相なり。故に祖は信心を信樂と屢仰らる、是も釋迦の大經付屬に、信樂受持と説れたからである。信樂の行者、受得はたゞ無疑の一心、是が其まゝ彌陀をたのむ心、此たのむ信には、樂欲が法爾として具して在る、それが願である。決して凡夫の意想から添へるでなく、持出す意でなく、信するの即ち歸命の心に、たのづから具はつてある、それ故彌陀は信樂と仰られたものである。和讃に、盡十方の无碍光佛、一心に歸命するをこそ、天親論主のみここには實は曇鸞の言なれ 願作佛心このべたまへごあるは、是を仰られたももので、一心にたのむ歸命信が願作佛心樂である、信の歸命の外に別に、願作佛心の願心を副るのでない、歸命が即願作佛心

なりと仰られたのである。之を正像末讚の、淨土の大菩提心は、願作佛心をすゝめしむ、即ち願作佛心を度衆生心となつたり、度衆生心といふことは、彌陀智願の廻向なり、廻向の信樂うる人は、大般涅槃をささるなりごある、此廻向の信樂ごある信樂が、即ち歸命の信心で、それが願作佛の心を、全うしてあるを顯された讚文である。

或は一類の拘泥者ありて、後生たすけたまへは、既に後生ご云へば次生のことで、生れるご云ふは土に屬す、即ち依報である、後生無量壽佛國と説くを以て知るべし。願作佛心は佛ご作ることを願ふ心なれば正報なり、依正を混雜するは不可なりご云ふ者あらんも、此人は往生即成物の義門を忘れた人なり。曇

鸞は論註下六十、無上菩提心即是願作佛心願作佛心即是度衆生
 心度衆生心即攝取衆生、生有佛國土心是故願生彼安樂淨土者、
 要發無上菩提心若人不發無上菩提心但聞彼國土受樂無間爲
 樂故願生亦當不得往生也釋せられて、淨土依云へる依報
 に生るゝに、願作佛心正云へる、正報の因を必要とせらる。
 曇鸞も亦依正混雜云べきか、祖は讚に淨土の大菩提心は等こ、
 上に引くが如く是も依止混雜せるが如し、是はも釋尊の教に
 依る大經の三輩章には、安樂國に生ぜん願ふ者は皆無上菩提
 心を發せ説く、菩提心は即ち作佛の心なり、論註は之を釋す
 るのである。其他彌陀の願は、十八願には若生者依報の誓
 なるに、其成就を説く釋尊は、願の如く即得往生説て、更に

住不退轉と作佛を説く、佛も亦依正混雜と謂ふべし。是其本彌
 陀の若生者は、往生即成佛なるが故也。彌陀の法門本此の如
 くなるが故に、祖は善導の必得往生を、不退の位に至ることを
 獲ることを彰すと、依正を一にせられ。蓮師も亦、たすけたま
 への御たすけを、正定聚と滅度で釋せられたこと前に出すが如
 し。是が彌陀法相承の規格なるに、何を苦んで依正を別たんと
 するか。
 以上の如くであるから、後生たすけたまへはたのむ心の目的
 であつて、此目的はたのむ心の外に思想を起すのでなく。たの
 む心と同時に在る自然法爾の樂欲である。

三 發願廻向

たのむ一念の時往生一定御たすけ治定ご存じ。

たのむ一念のごきは、成就文の即の字の意なり。龍樹が即時云はれた相承なり。信巻末の始に、信樂に一念あり、一念は斯れ信樂開發の時尅の極促を顯し、廣大難思の慶心を彰すなりと釋せられ、愚禿鈔には此一念中の前心後心に約して、本願を信受するは前念命終なり、即得往生は後念即生なりと釋して、一念に此二相、即ち前相は本願信受聞其名號、後相は即得往生住不退念即生で、此二相の中間に在る乃至一念に、前後の二相が具することを示させられたもの、前念は信樂開發の時尅の極促、後念は即ち廣大難思の慶心、参考是が祖語の念佛まうさんとおもひたつころなり存覺は之を淨土見

開集十二に往生のさだまるしには慶喜の心おこるなり慶喜の心おこるしに之には報恩謝德のおもひありと云へりおもひたつ語するし語注意すべし之を前の後生たすけたまへとたのみまうし候に對すれば、前念はたのむころ、後念は御たすけ決定のころである。しかしながら此二相は一念中の二相であるから、二念をわこす云ふのではない、是は誤らぬやうに心得べし。

例せば、飯を食ふにはむまいといふ念ご、飢を治するといふ念ご、此二相は具してあれども、意には別に二念はわこさぬ。なぜなれば、之をうましとするは食するので、食するは飢を治する爲の因で、此因あれば必飢は治するといふ果が、必然に具してあるを知て居るから、一口食ては是で飢が治するご思ひ、又一口食ては是で飢が治するご、一口く別段に飢が治するご

いふ念想はたこさぬ、此念想はたこさぬけれども、憶念には腹はふくれる、胃は満足すること承知し、安心して居る、必然の果ある事には、因あれば安心なられてあるが、性相の定る所である。前念の信受本願即ち信樂開發、即ち彌陀をたのむ言ははかばは全くの因である、是ご同時の果が法爾として具してあるのが、後念即生の即得往生、即ち廣大難思の慶心、即ち往生一定の心である。

今前念なる信受本願の相を、もろくの乃たのみ申て候ご述終りた故、後念の廣大難思の慶心、即ち即得往生後念即生のことを述るの故、たのむ一念のこきご仰られた、猶入念するが、此愚禿鈔の前念後念は、前後二念あるのではない、乃至一念の、

一念の中の二相なるを了解すること、

往生一定御たすけ治定ごは、

往生一定は、願成就文の得往生なり。御たすけ治定は、住不退轉なり。得往生の上にある即の字は、前にたのむ一念のこき

ご云てある故、今得往生住不退轉を仰られたものなり。此たのむ一念の時に二つの益がある、一つは得往生なり。一つは住不退轉なり。得往生の得はさだまるご云ふご同じ、得、獲、成就

ご、決定ごは同じ意味なり。祖は一多證文三、正定衆の位につきさだだまるを、往生をうごはのたまへるなりご仰られ、存覺は

眞要鈔十九、得ごいふはさだだまる意なりご釋されてある、善導

はよく定得往生の言を使はれる、往生が定まるから、一面には

浄土の人ご定まり、一面には三界六道に生るべき因も果もなく
なる。

住不退轉は、上に擧た御一代聞書に、御たすけありたるは正
定衆のかたごあるので、彌陀法では正定聚ご不退轉は同一であ
る。此往生ご不退轉ごが即の一念に定まるから、たのむ一念の
ごき往生一定御たすけ治定ご仰られた、漢文の法で云へば、是
は一頭兩脚法である。頭が一つで脚が二本あるご云ふ義で、一
頭兩脚ご云ふ。即^口得往生、此圖の如く、即の頭即ちたのむ一
念のごきの一つに、得往生ご住不退轉の二脚があるのである。
得往生は依報のかたで、浄土の人の數に入る、住不退轉は、此
一生終れば佛になるべき位に定まつたご、此二つの利益が

たのむ一念、即ちのごきに得られるを示す言である

ご存じごは、

ごは指定する言である。諸の雜行乃至御たすけ治定まで述て來
たごを指定してご、ご云ふのである。

存じごは、言の意味は爾雅に、在なり察なりご云てあれば、
心に察に在るご云ふごを存じご云ふ、即ち明記不忘を云ふの
である。存じご云ふ言の例は、御文一帖四、本願の由來を存知
する、同十一、他力の大信心の次第を、よく存知したらんに相
尋て信心決定し、三帖十、開山の定めおきたまへる正義を、よ
く存知してごあるが如き、皆此存じの義なり。世間にては何々
の事は承知かご尋られて、それを存じて居るご答へるのは、心

の中に其事を持て居ると云ふ意味なり。今こゝに存じと云ふは、諸の雜行^{もろく}乃至御たすけ治定^{ちせう}が安心^{あんじん}となつて、心に明記^{みやうき}不忘^{ぶたう}で持て居ると云ふことを存じと述るのである。

さて此存じは只一言であれども、非常に大切なことであつて、是が初に説明した念持の事である。依て此存じの意義を詳にせねばならぬ、既に云ふが如く、この一字は指定の辭であつて、何を指定したか云へば、この字より上のもろくより以下、一切を指定したので、其指定した一切の事を、心に存じましたと述べたのなり。

然るに、此指定されたもろくの乃至のみ申て候までは安心であるが、此安心は何から出た安心であるか云へば、願成就

文から出たのである。諸のよりたのみ申候までは、成就の諸有衆生聞其名號信心觀喜乃至一念で、たのみ一念より御たすけ治定までは、至心廻向願生被國即得往生住不退轉である。第十八願の眞實信心は、願成就文であるは、眞宗の嚴格な規則であつて、祖師が天親菩薩の一心を釋して、一心といふは教主世尊のみことを、一たこゝろなく疑なしとなり、是即ちまことの信心なりと云はれたは、教主世尊のみことゝは廣くは一切法門なれども、天親菩薩の安心の一心は、信心二心なきが故に一念といふ、是を一心と名くるなりの祖釋の如くで、即ち願成就の信心觀喜乃至一念であるから、此教主世尊のみことゝ云ふは願成就文にかぎる、況や論主自ら我れ修多羅眞實功德相に依て、願偈の總

持を説て佛敎と相應すと云ふ、彌陀の淨土を願生して修多羅に依るならば、彌陀法を説く經なるは無論なり、彌陀法を説く中の眞實功德は名號なること無論なり、名號の相なれば即ち願成就文なること亦無論也。但し願成就文と云へば、彌陀と別なる釋迦の説の如く誤解する者なきに非ず、是等誤解者あらんことを恐れて、祖は眞實報土の正因を二尊のみここにたまはりてと云へり。眞實報土の正因とは、正定の因也、正定の因は唯信心のみなり、信心を正因とするは願成就にかぎる。況やたまはることは廻向也、廻向を説くも亦願成就にかぎる、然れば此讚は願成就の意なり。願成就は釋迦一佛の説なり。それを二尊のみここに仰られるは、釋尊の説即ち彌陀の説なるが故なり。銘文の

歸命發願廻向の二釋、並に釋迦阿彌二尊とせらる、是釋迦善知識の説、即ち彌陀の説なるが故なり。

是に於て注意すべきは、覺師の釋なり、覺師の相承を忘れると祖意は明ならぬ、それは願成就をぬきにして、本願へ直に向ふやうになるからである。祖師は本願を釋せられるには、必願成就を以てなされる。其意を一語を以て盡されたは、横超とは願成就、一實圓滿の眞教、眞宗是也とある信卷末の釋なり。又選述の體裁にて分明なるは、廣文類を攝略なされた畧文類は、餘師の釋を畧し、七祖の釋は偈文のみに止め、僅に善導の二河喩の略出あるのみ、論も略し、經も略し、略の極は因願一切を略して、唯願成就文のみを引せらる、本願すら畧せられたるに

願成就文は略なされず。是淨土眞宗を開かせられる教行信證に、願行信證ごなされず、教より開く行信證なりごなされた祖意の顯るゝ者なり。教は即ち釋尊の教なり、覺師が十八の願にござりては、また願成就を以て至極ごすご仰られた所以である。覺師は此祖意を明にするを以て、終身の事業ごなされ、願成就文を以て、凡夫往生の安心ごなされ、平生業成の義を明にせられた。古來學者の異途に走る者は多く覺師を忘れて、爲に祖意を心得誤りた者である。口稱づのりの如きは、覺師を忘れるの著明なる者である。

今二三の、覺師の語を出して、其重要なる意義あることを示すべし。口傳鈔下二十、下至一念は本願をたもつ往生決定の時尅なり、上盡一形は佛恩報謝のつごめなりご、是行を直に信につごめてた釋なり。行はつごめてもく行なるべき筈なるに、行變じて信ごなるは奇なり。是も釋迦善導祖師の相承なり。是がわからねば蓮師の、下至一念ごいふは信心決定のすがたなりもわからねぬ、又改邪鈔本二十二、三經の安心あり、其中大經をもて眞實ごせらる、然らば觀小の大經のなかには第十八の願をもて本ごす、然らば十九二十は末也、十八の願にござりてはまた願成就をもて至極ごす、然らば十八願は至極に非ず其理由云何凡夫往生の理由を明にするは願見へ信心歎喜乃至一念をもて、他力の安心ご思召るゝゆへなりご、此文の如き金玉も啻ならず、佛意祖意を僅々數語の中に收めて、彌陀法門の法度を明にせらる。十八の願にござりては、ま

た願成就をもて至極しごくの如き、切實せつじつ的確てきかく、半點はんてんの遷就せんじゆ模稜もりようの
氣なし。其他そなた同末どうまつ十六の、廢立はいりふの釋しやく、本願ほんがん鈔せうに、元祖げんそ祖師そし傳承でんしやうの
釋しやく、願々げんげん鈔せうの稱名しやうめい聞名もんめい及び成上じやうじやう起下きげの釋しやく、最要さいやう鈔せう佛心ぶつしん信心しんの釋しやく、
心命しんめい身命しんめいの釋しやくの如き、祖意そいの蘊底うんていを盡つくし、本願ほんがんの至理しりを顯あはして
惑まどふ所ところなからしむ、是等これらの覺師かくしの釋しやくによりて改悔がいげ文もんを見れば、
全く願成就がんじゆじゆ文もんの國譯こくやくも言ふべきである。

若言もしいふ南無なむ者ものの釋しやくを以て言は、諸もろの至いたたのみ申候まうしるは歸命きめいであ
つて、たのむ一念いっねん乃な治定ちぢぢやうは發願はつがん廻向くわうの意いである。

問曰とまひく。然らば願成就がんじゆじゆ文もんも歸命きめい發願はつがん廻向くわうのこゝろなれば、南無なむ
の二字にじのこゝろであつて、六字ろくじのこゝろでなく、然るに安心あんじんの
體たいは南無なむ阿彌陀佛あみだぶつである云ふは、御文おんぶんの諸處しよくに仰おほせられる、そ

れにも拘からず改悔がいげ文もんは南無なむの二字にじのこゝろで、阿彌陀佛あみだぶつの四字よじ
は缺かてあるは何故なか。

答こたへ。曰いは。是これが安心あんじんの規格きかくである。それは如何いかなる故ゆへかといふ
に、安心あんじん云いへば信しんで、信しんを正しやう因いんとするが彌陀みだの願意がんいであるか
ら、願成就がんじゆじゆ文もんは信心しんの成就じゆじゆ文もんであつて、行ぎやうは缺かけてあるやうで
あるが、それは信しんに行ぎやうが具ぐする故ゆへである、其具そのぐしやうはいかに
具ぐするか云ふに、阿彌陀佛あみだぶつ即すなはち其行そのぎやうは、所廻向しよくわうの行ぎやうである、
所廻向しよくわうの行ぎやうは、能廻向のうくわうの發願はつがん廻向くわうに收おさまる。此この指南しなんは御文おんぶんに明あき
になつてある、其例そのれいを舉あげれば、三帖さんせつ八、南無なむの二字にじは歸名きめいのこ
ころなり、又また發願はつがん廻向くわうのこゝろなり、此このいはれなるが故ゆへに、南
無なむ歸命きめいする衆生しゆじやうを、必攝取かならずせつしよしてすてたまはざるが故ゆへに、南無なむ

阿彌陀佛あみだぶつは申まうす也なり、四帖しじやう十四、南無なむといふ二字にじは、すなはち歸命きみやうといふころなり、歸命きみやうと云ふは、衆生しゆじやうの阿彌陀佛あみだぶつ後生ごじやうたすけたまへきたのみたてまつるころなり、また發願はつげん廻向くわうといふは、たのむ所の衆生しゆじやうを攝取せつしゆして救すくひたまふころなり、是即これすなはちやがて阿彌陀佛あみだぶつの四字しじのころなり、其外そのほか五帖ごじやう五、同十三、の如ごとき、皆みな六字ろくじを標へうしながら、阿彌陀佛あみだぶつ即すなはち其行きぎやうの釋しやくなしに、歸命きみやうと發願はつげん廻向くわうの南無なむの二字にじの釋しやくのみで、阿彌陀佛あみだぶつの四字よじの、たのむ衆生しゆじやうをたすけたまふいはれを、發願はつげん廻向くわうで明あかさるゝは、即すなはち所廻向しよくわうの阿彌陀佛あみだぶつ即すなはち其行きぎやうを、能廻向のうくわうの發願はつげん廻向くわうへ收おさめての釋しやくである。

又阿彌陀佛またあみだぶつ即すなはち其行きぎやうを能廻向のうくわうの發願はつげん廻向くわうへ收おさめての釋しやくのみなる。

らず、發願はつげん廻向くわうまでも歸命きみやうへ收おさめての釋しやくもある、四帖しじやう六、五帖ごじやう九、なご是これである、是これは合がっ三さん爲ゐ一の祖釋そしやくに依よつたもの、合がっ三さん爲ゐ一の釋しやくとても願成就ぐわんじやうじゆの外ほかではない、信心しんくふ歡喜くわんぎ乃至な一念いっねんを、他力たうりきの安心あんじんとたぼしめさるゝが即すなはち是これである。又阿彌陀佛またあみだぶつ即すなはち其行きぎやうを發願はつげん廻向くわうへ收おさめた釋しやくは、願成就ぐわんじやうじゆに聞其名號もんごみやうがうと云ふて、正まさに其說そのとがせらるゝ所ところは、歸命きみやう發願はつげん廻向くわうの、南無なむの二字にじのいはれのみを說とがせられた教意けういを、相承さうじやうなされたものなり。是これは四法しほふ建立こんりよの法相ほつさう、眞實しんじつ信心しんくふ必具ひつぐ名號みやうがうの祖意そいを承うけた釋義しやくぎである。改悔文がいかいもんは願成就ぐわんじやうじゆの説相せつさうの如ごとく、歸命きみやうと發願はつげん廻向くわうの二つのころである、三帖さんじやう六を拜見はいけんすべし。

此この如ごとくであるから、改悔文がいかいもんは全く願成就文ぐわんじやうじゆもん、全く言南無者ごんなむわの

釋其まゝを、行者の安心として述べたのである。是が行者の意でこ
 しらへ出したのでなく、全く善知識より授られた、南無阿彌陀
 佛のことはりを聞わけ、受ごられた安心であるから、下に此御
 ここはり聽聞申わけ候ごあるので、即ち聽聞申わけた心である、
 善知識の言から授かつたのである。之を覺師は願力不思議の佛
 智をさづくる善知識の實語ごも、知識傳持の佛語ごも仰られた、
 彌陀釋迦龍樹天親曇鸞道綽善導源信源空吾祖等ご、傳へ持つ所
 の善知識の教は、二尊の言教の其まゝを傳るのであるから、傳
 持の佛語ご仰られた。願力不思議の佛智を授るは、善知識の言
 が即ち願力不思議の佛智である。それ故善知識の實語ご仰られ
 たもの、實語ごは如實の語ごいふこと、如實ごは佛智の眞實を、

佛智の如く傳へるから實語ご云ふ。實語であるから即ち佛語で
 ある、此佛語を諸の雜行乃至治定ご授けられ、それを聽聞申しわ
 けて、授けられた如く心に存じて在るから、存じご申述るので
 ある。此存じの一語が、正に知識傳持の佛語を、我物にしたこ
 ごを言ふのである。

此いはれである故、善知識の教授る言も傳持の佛語なれば、
 聽て受ごつた改悔を申述る言も、傳持の佛語のまゝが受ごられ
 た安心なるが故に、此佛心を凡夫に授けたまふごき、信心ごい
 はるゝなりご覺師は申された。佛語は佛の語である、佛の語ご
 は願成就文なり。

語ごいふものは、心を傳へるものである。佛の語は佛の心を

傳へる、知識傳持の佛語は佛の心を傳るのである。傳へるは行者に教へ授けるのである。それを覺師は本願鈔に黒谷の聖人より本願寺の聖人、相承します所の他力不思議の信心を、善知識ありて傳へ説て授るを、行者聞得るによりて、文の如く一念歡喜のれもひねころについて、往生たちごころにさだまるこも、執持鈔には、善知識の語のしたに、歸命の一念を發得せば、其時をもて娑婆のれはり臨終ごれもふべしこも、最要鈔には、經釋既に聞をもて詮要ごせられたり、よく聞く所にて往生の心行を獲得する條顯然なりこも釋されて、聞くは即ち善知識より聞く、善知識の語は佛語なり、實語なり、それが佛心を傳へるものであるから、聞た行者の心に受ごられたれば、佛心が

即ち信心である。

佛心ごは如何なるものか、本願の三信即ち佛心、それが南無の二字であれば、之を傳へ説て聞せるは、佛心即ち信心を授るのである。唯信鈔文意三十、釋迦は慈父、彌陀は悲母、われらが父母ごして信心を教たまへりご知るべきなりごある、此信心を教たまへるが願成就で、それを傳へる傳持の佛語、それが即ち佛心で、之を他力の大信心ごいふのである。其佛心が心に受ごられて、明記不忘の憶念になつて在る故、存じご申述る、即ち本願や名號、名號や本願、本願や行者、行者や本願で、本願の三信ご名號の阿彌陀佛を收めた南無ご、行者の述る改悔文の安心ご、並べてみれば、全く同じものである。是を蓮師は、彌陀